

京都教育大学

2020年度 修士論文

シェアリングを重視した
大学キャンプ実習が
信頼感と自己開示性に及ぼす影響

教科教育専攻 保健体育専修

関 佳那子

指導教員：林 英彰

指導教員：遠藤 浩

目 次

第一章 序論

1. はじめに 1
2. 研究の目的および課題 8
3. 研究の限界 9
4. 操作的定義 10

第二章 研究方法

1. 調査対象者 13
2. キャンプ実習の概要 14
3. 「シェアリング」活動の概要 18
4. 検査および手続き 23
5. 統計処理 28

第三章 結果および考察

1. 信頼感の変化 30
2. 自己開示性の変化 42
3. 信頼感と自己開示性の関連 48
4. シェアリングにおける発言の分析 58
5. 自己開示性とシェアリングの関連 83
6. 考察 96

第四章 結論 106

引用・参考文献

巻末資料 A（調査・測定資料）

巻末資料 B（統計補足資料）

第一章

序論

1. はじめに

現代社会において、個人をとりまく家族の在り方や地域社会、社会全体が徐々に変化してきており、うつ病患者や自殺者の増加、引きこもり、スチューデント・アパシー、人間関係の希薄化やそれに伴うコミュニケーション能力の低下など、現代の若者が抱える問題は多岐にわたる。

コミュニケーション能力の低下においては、オンラインゲームやタブレット、スマートフォン、SNS (Social Networking Service) の普及により対面しなくても会話ができるようになったことで、人と人との交流が乏しくなり人間相互の接触が希薄してきていることがいえるだろう。

このような対面的なコミュニケーションの減少が人間関係の形成をより困難にしていることが危惧される。

文部科学省の第15期中央教育審議会¹⁾が提出した「21世紀に展望した我が国の教育の在り方」(第一次答申)に「生活体験や社会体験の不足もあって、子どもたちの人間関係を作る力が弱いなど社会性の不足が危惧される」と指摘されていることから、青木(2003)²⁾は「全体的に青少年の対人関係能力が衰えてきているのが現状であり、この現状については『社会的スキル』の不足が要因の一つである」と述べている。

社会的スキルとは、他者との相互作用を円滑に行うための社会的行動であり、子どもの頃の家族関係、学校や地域における友だちなどの仲間集団の中で養われるといわれている。しかし、現代の青少年には直接的に体験し、感じる、考えることが不足しているため、社会的スキルの低下は今日の青少年問題をもたらす要因の一つである。そして、この社会的スキルの向上に欠かせないのがコミュニケーションであり、他者とコミュニケーションを取るために必要な要因として「自己や他者に対する信頼感」が重要であると考えられる。

信頼感とは「相手に対して、信頼できる、信頼して損はない、という感情またはその判断のこと」である。天貝（1995）³⁾は発達的な観点に基づき、信頼感を「自分あるいは他人（他の対象）に対して抱く信頼できるという気持ちや自分自身の能力や他人の存在の一貫性についての確信」と捉えている。また天貝は過去の信頼感に関する研究を総括し、信頼感の基盤は人生の初期段階に第一に獲得されるが、その獲得は不変ではなく、自己への問い直しがなされる青年期において再獲得期を迎える可能性を指摘した。そこで現在を基準として信頼感を測定する尺度を作った結果、信頼感に「自分への信頼」、「他人への信頼」の肯定的な側面と、否定的な側面である「不信」の3つの側面を見出している。

山田（2010）⁴⁾は「信頼感の発達を考えると、青年期は不信体験の克服から新たな信頼感を模索する時期であり、また自己信頼が確立していく重要な時期である」と述べている。

また、自分あるいは他者をどれだけ信頼しているかを判断する心理的側面の一つとして「自己開示性」が挙げられる。自己開示性とは「個人的な情報を他者に知らせる行為であり、相手にわかるように自分自身を

あらわにする行為」(Jourard, S. M.、1971)⁵⁾のことをいう。つまり、自分がどんな人間であり、今何を考え、何を感じ、何を悩んでいるか、などを相手に伝えるということである。他者に対して適切に自己開示できることは、深い人間関係の形成において必須の条件とされている。西村(2020)⁶⁾は「自己開示は対人関係の親密化において重要な要因として取り上げられることが多い」と述べている。

自分の考えや感じていることを他者に知らせるという行動は社会の様々な場面において欠かすことのできないものであり、誰もが日常的に経験していることである。しかし、山田(2010)⁴⁾は日常で経験していても自己開示をするにあたって妨げになるものがあると指摘している。それは「自分は受け入れられないのだと思い込んでいるときに現れる他者に対する恐怖心であり、不信である」とし、「逆に、信頼は、自己開示を生み出し、自己開示はさらに信頼と理解を生み出していく」と述べている。

岡田(1995)⁷⁾によると、現代青年の友人関係は希薄化が危惧されており、傷つけ合うことがないよう表面的な関係がみられるとし、また岡田(2010)⁸⁾は大学生の友人様式の一つとして、他者からの評価を気にして、友人関係の深まりを避ける関係回避特徴があると指摘している。

つまり、お互いが傷つかない方法として表面的にふるまい、より深い関係にふれる部分では無関心でいることでお互いに自分自身を守ろうとしているのではないだろうか。

このような現代青年の課題を踏まえ、内閣府は「子ども・若者白書」(2014)⁹⁾のなかで、今を生きる若者の意識において諸外国と比較し、日本の若者の意欲の低さ、友人関係への満足度や安心感が低いこと、そ

してコミュニケーション能力の不足などを報告している。

文部科学省のコミュニケーション教育推進会議（2011）¹⁰⁾では、コミュニケーション能力の捉え方とその育成について「いろいろな価値観や背景を持つ人々による集団において、相互関係を深め、共感しながら人間関係やチームワークを形成し、正解のない課題や経験したことのない問題について、対話をして情報を共有し、自ら深く考え、相互に考えを伝え、深め合いつつ、合意形成・課題解決する能力と捉え、多文化共生時代の 21 世紀においては、このコミュニケーション能力を育むことが極めて重要である」ということを意義付けている。

また内閣府（2018）¹¹⁾は、「社会で求められるコミュニケーション能力や自立心、主体性、協調性、チャレンジ精神、責任感、創造力、変化に対応する力、異なる他者と協働する能力を育むためには、様々な体験活動が不可欠である」と報告している。

これらのことから、前述で取り上げたような青少年のコミュニケーション能力を育成していく一つの手段として「体験活動」が挙げられる。

文部科学省中央教育審議会は平成 25 年（2013）1 月に答申した¹²⁾「今後の青少年の体験活動の推進について」の中で、体験活動の意義とその効果として、「社会を生き抜く力」の養成、規範意識や道徳心の育成、学力への好影響などを挙げ、体験活動の重要性を報告している。

また体験活動を中心とした教育キャンプにおいては、キャンプ参加による人間関係への効果についての研究が数多く行われている。長谷川ら（2004）¹³⁾はキャンプに参加することで参加者の友達付き合いにポジティブな変化が見られること、中川ら（2019）¹⁴⁾は、対人関係スキルを向上させること、正親ら（2016）¹⁵⁾は信頼感に肯定的な効果を及ぼすこと

を明らかにしている。

高畑ら（2015）¹⁶⁾は、教育キャンプにおいて班グループのまとまりが教育効果を向上させ、参加者同士の人間関係を深め、その後の大学生活の充実に寄与することを報告している。

このように、体験活動が現代の子どもや若者に対する心理的な課題について青少年・青年に与える役割は大きいものであると考えられる。

そこで本研究では、青年の体験活動におけるふりかえりに着目した。

ふりかえりとは、体験学習法の過程として、Kolb（1984）¹⁷⁾が提唱した体験学習法サイクルモデルの循環過程の一部である。そのモデルによると、体験学習法とは、体験、内省・観察、一般化、仮設という4つのステップを基盤とし、それらを一連のサイクルとして繰り返し行う方法である。

他にも、田中（2009）¹⁸⁾は「ふりかえりとは活動からの気づきや学びを整理し、次への活動や日常生活へつなぐパイプ的な役割をするものであり、活動を振り返ることで、その活動を単に‘体験した’という経験で終わらせるのではなく、活動を共にした仲間と活動中の出来事について思い出し、意味づけをすることで‘体験からの学び’を得る機会である」と述べている。

青年の体験活動の代表例として実施される大学キャンプ実習では、小グループでの活動を基本として行われることが多く、課題達成をともなう活動や困難な状況を克服するような活動、個人では成し得ないグループの協力を必要とする活動が多くあり、グループの仲間同士で喜びや悲しみ、気づきなどの感情を分かち合う体験が自然となされるものである。荒木（2007）¹⁹⁾は、このような教育キャンプにおいて、互いの気づきを

グループで分かち合う「シェアリング」と呼ばれる活動を「ふりかえり活動」と定義し、このふりかえり活動を意図的に導入することが注目され、多くの実践がなされている。また、遠藤ら（2014）²⁰⁾は大学キャンプ実習におけるふりかえり活動の教育的効果として、自己肯定意識、対人不安意識、自己成長性の観点から検討し、大学キャンプ実習における「ふりかえり（シェアリング）活動」導入は一定の教育的効果があることを示唆している。

ただし、これらの「ふりかえり（シェアリング）活動」は各グループで行われ、実際のふりかえり（シェアリング）で参加者がどのような発言をしていたかについては定かではなく、参加者の心理的な教育的効果に発言のどのような要素が影響していたのかという曖昧さなど、様々な要因が課題として残る。

そして、ただふりかえりを行えばいいわけではなく、ふりかえりの程度や学習効果との関連についても考慮しなければならない。荒木ら（2011）²¹⁾はふりかえり（シェアリング）を促進させる要因として、体験活動終了後や夕方、夜の時間帯、食事やミーティングなどの活動、指導者や班員の存在を挙げている。また、ふりかえりの程度と学習効果を結びつける支援方法の開発（星野，2007）²²⁾や実践的指導法（荒木ら，2011）²¹⁾が今後の課題として指摘されており、より良いふりかえりの方法についても検討する必要があると言える。より良いふりかえりの方法の一つとして、目標設定を行ったうえでふりかえりを行うことが考えられる。高野（2013）²³⁾は「グループの目標、個人の目標、長期の目標、短期の目標等を様々な形で明確にすることで、ふりかえりの際の焦点が明確になる」と述べており、目標設定を行うことがふりかえりの効果を促進する

と考えられる。本研究で行われた「ふりかえり（シェアリング）活動」においても、あらかじめふりかえり（シェアリング）の実施方法について、事前に説明を行い、各班担当指導者「キャンプカウンセラー（以下、カウンセラーとする）」と共通認識したうえで行われた。ここからは、「ふりかえり（シェアリング）活動」を「シェアリング」と記述していく。

以上のことから、各グループ内で「シェアリング」を行うことは、長い時間を共に活動する仲間のことについてよく知り、同時に自分自身の様々な情報を伝えていくため、キャンプ参加者の「自己と他者への信頼」または「自己開示性」をより向上させることが予想される。

そこで、本研究では、シェアリングを重視したキャンプ実習が参加者の信頼感と自己開示性に及ぼす影響を明らかにすることとし、実際に「シェアリング」活動で発言された参加者の発言内容とその変容がどのように影響するかも合わせて検討することとした。

2. 研究の目的および課題

本研究の目的は教員養成大学における大学キャンプ実習が参加者の信頼感および自己開示性に及ぼす影響を明らかにし、シェアリングにおける発言内容との関連についても検討することである。

そのために、以下の5つの課題を設定し分析していくこととする。

課題1：キャンプ実習参加者の信頼感の変容に及ぼす影響を検討する。

課題2：キャンプ実習参加者の自己開示性の変容に及ぼす影響を検討する。

課題3：キャンプ実習参加者の信頼感と自己開示性の関連を検討する。

課題4：キャンプ実習参加者のシェアリングにおける発言内容の変容を検討する。

課題5：大学キャンプ実習参加者の自己開示とシェアリングの関連を検討する。

3. 研究の限界

- 1) 本研究における調査対象者は、京都教育大学教育学部の大学キャンプ実習に自分の意志で参加した者に限定され、無作為抽出法によるものではなく、一般化には限界がある。
- 2) 本研究における「信頼感」および「自己開示性」はそれぞれ使用された検査用紙によって測定されたものであり、一般化には限界がある。
- 3) 本研究における「ふりかえり発言チェックリスト」は、得られた音声データから独自に設定・作成したものであり、標準化の試みはされておらず、一般化には限界がある。

4. 操作的定義

本研究において、以下のような操作的定義を用いている。

1) 信頼感

信頼感とは相手に対して、信頼できる、信頼して損はない、という感情またはその判断のことをいう。本研究では天貝（1995）³⁾ が作成した信頼感尺度で測定されたものをさす。

2) 自己開示性

自己開示性とは「個人的な情報を他者に知らせる行為であり、相手にわかりやすいように自分自身をあらわにする行為」のことをいい、自分がどんな人間であり、いま何を考え、何を感じ、何を悩んでいるか、などを相手に伝えるということである。本研究では、末永（1987）²⁴⁾ が作成した自己開示行動自己評価尺度 15 項目によって測定されるものを指す。

3) ふりかえり

ふりかえりは体験の内省を行い、体験の意味を解釈し、次の体験へと活かす一連の過程をさす。本研究では、参加者一人ひとりの気づきをグループで共有し、自己や仲間の内面に目を向けることを目的に意図的に

設定したふりかえり（シェアリング）活動をさす。

4） シェアリング

シェアリングとは「わかちあい」のことをいい、個人の気づきや学びを同じ体験をしたグループのメンバーと報告し合い、共有することで、気づきに広がりや深まりを持たせることができると考えられている。

本研究では、ふりかえりの中に含まれるシェアリングを重視したこの活動を「シェアリング」活動とする。

第 二 章

研究方法

本研究の目的は教員養成大学におけるキャンプ実習が参加者の信頼感および自己開示性に及ぼす影響を明らかにすることである。また、シェアリングにおける発言内容との関連についても検討する。

1. 調査対象者
2. キャンプ実習の概要
3. 「シェアリング」活動の概要
4. 検査および手続き
5. 統計処理

1. 調査対象者

本研究の調査対象者は、2019年9月2日から9月6日までの4泊5日で実施された京都教育大学正課授業である大学キャンプ実習に参加した大学生1・2回生、53名（男子19名 女子34名）とした。

合計53名に質問紙調査を行い、有効回答の得られた計50名（男子18名 女子32名）を分析対象とした。

分析対象者の男女の内訳は以下の通りである（表1）。

表1 男女内訳

男	18
女	32
合計	50

2. キャンプ実習の概要

本研究で対象とした大学キャンプ実習は、京都府南丹市園部町の「京都府立るり溪少年自然の家」のキャンプ場で実施された。令和元年9月2日から9月6日まで、4泊5日の期間で行った。

キャンプ実習は小グループで活動に取り組み、テント泊、全食自炊キャンプ活動を基本とした。キャンプ実習参加者のグループ構成は、調査対象者のところで述べたように男女混合で、領域や部活・サークルが被らないように振り分け、なるべく友人関係のないものとし、各グループ6～8名とした。各グループには、キャンプカウンセラー1名が担当した。グループの人数を6～8名と設定したのは、「ディスカッションの人数はこの6～8名が最適といわれ、少人数のほうが心置きなく話し合え、キャンプ参加者はあがることもなく、また発言もよく聞き取れる」とA.V.Mitchellら(1966)²⁵⁾が述べているためである。

キャンプ実習のプログラムの主な内容は以下の通りである（キャンプ実習の日程は表2に示す）。

① 自然体験ゲーム

自然体験ゲームでは主に五感を用いて、仲間と協力して行う様々な活動（アクティビティ）が行われた。ただ単に活動を行うだけではなく、教育的な視点も取り入れつつ、活動の中で自然の仕組みや、コミュニケーションの取り方などを学ぶ活動となっている。またキャンプ実習2日目に行われることもありアイスブレイクの役割を果たすとともに、グループのメンバーの協力を必要としており、グループの凝集性を育てるこ

とを目的とした活動である。

② 森の芸術展

森の芸術展は各グループに1つのテーマを決めて、オリジナルの作品を作る共同創作活動のことである。自然物を用いてテーマに沿った作品を作り、完成後には、各グループの独創的な方法で作品の発表会を行う。

③ 遊び作り、遊びの体験

遊び作り、遊びの体験とは、各グループでオリジナルの自然を生かしたゲームや遊びを作り、ゲームラリー形式で各グループが作成した遊びを体験する活動である。

④ 森のお祭り

森のお祭りとは、簡単なゲームと、食べ物のお店をグループごとに企画、作成し出店するお祭りのことである。各グループで異なる遊びのお店と食べ物のお店を1店ずつ出すものである。これらは一日を通して、メニュー作成から準備、製作、料理などを行う。店の看板や外装、食べ物の盛り付け方などもグループのメンバーで考えるなど協議と共同作業を必要とする活動である。

⑤ まとめの会

まとめの会とは、キャンプの締めくくりとしてキャンプで感じたことや印象に残ったことなどを劇や歌などを交えてグループごとに発表する「スタンツ発表」と呼ばれる時間で、発表することでグループのまとま

りを確認することを目的とした活動である。

②、③、④、⑤の活動はどれもグループの話し合いからスタートし、グループメンバー全員で話し合ってゴールを決め、それに向かって活動する共同創作の場である。話し合いの進行や準備、料理の役割分担、時間配分など様々なことを考えながらコミュニケーションをとり、グループが1つになって活動を行うことを目的としている。

各グループに配置された班担当カウンセラーは、話し合いや作業が円滑に進行するようファシリテーターの役割でグループに関わった。

表2 キャンプ実習の主なプログラム

	1日目(9/2)	2日目(9/3)	3日目(9/4)	4日目(9/5)	5日目(9/6)
5:00	集合(掲示板前) バス出発				
6:00		起床 朝の集い	起床 朝の集い	起床 朝の集い	起床 朝の集い
7:00		朝食作り	朝食作り	朝食作り	朝食作り
8:00		朝食	朝食	朝食	朝食
9:00					
10:00		自然体験ゲーム	遊び作り (企画と準備)	森のお祭り準備	片づけ
11:00					まとめの会
12:00					昼食作り 昼食
13:00		昼食作り 昼食	昼食作り 昼食	昼食作り 昼食	移動 閉講式
14:00					バス出発
15:00	少年自然の家到着 開講式	森の芸術展	(各班の作成した) 遊びの体験	森のお祭り準備 ・遊びの店作り ・食べ物店作り	大学到着 解散
16:00	テント設営				
17:00	夕食作り	夕食作り	夕食作り		
18:00	夕食	夕食	夕食	森のお祭り	
19:00	入浴	入浴	入浴		
20:00				入浴	
21:00	グループ別活動	シェアリング活動	シェアリング活動	シェアリング活動	
22:00					
23:00	就寝	就寝	就寝	就寝	

3. 「シェアリング」活動の概要

本研究の目的は、信頼感および自己開示性とキャンプ実習におけるシェアリングの発言内容との関連について検討することである。そのため、本研究ではキャンプ期間中の就寝前に各グループで行うシェアリングの時間を設けた。キャンプ2日目、キャンプ3日目、キャンプ4日目の計3回実施し、1回の時間は1時間から1時間半程度とした。

教育キャンプでは、テント設営や野外炊事などの寝食といった生活に関するものだけでなく、プログラムにおいてもグループ活動を基本とすることが多い。また教育キャンプのプログラムには、困難な状況を克服するものやグループの協力を必要とするものがあり、これらにおいては喜びや悲しみなどの感情を分かち合う体験が自然となされるものである。

近年、教育キャンプをはじめとする野外教育においてふりかえりと呼ばれる活動を意図的に導入することが注目され、数多く実践されている。野外教育で導入されているふりかえりとは、体験学習法から誕生したものである。図1に示すように体験学習法¹⁷⁾は、一般に、(1)体験をして、(2)その体験を内省したり、自他の体験を観察し、感受性を発揮して気づき、(3)体験したことを抽象的な概念を用いて考えたり一般化を試みて、(4)新しい体験に導くために、自分の行動の目標や課題をつくる仮設をし、次の体験につなげるという過程で構成されている。

この4つのサイクルは大切にされ、循環過程とも呼ばれている。

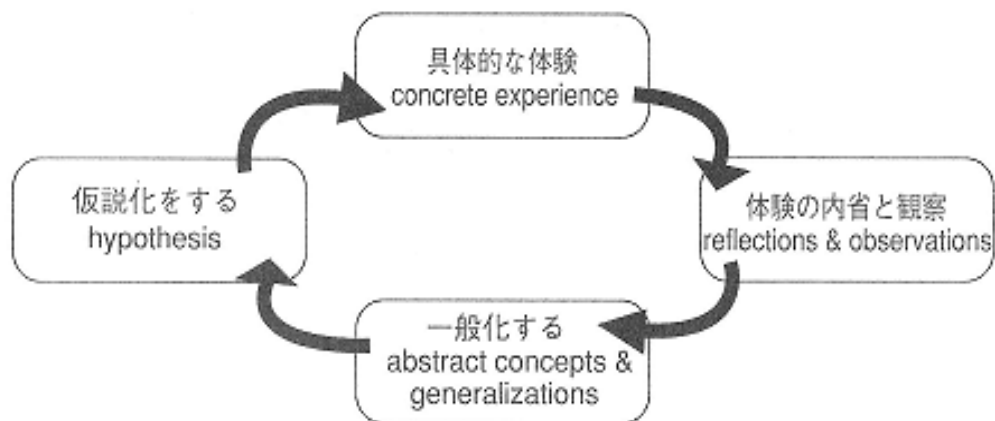


図1 Kolbの体験学習サイクルモデル(1971)

ふりかえりは、体験の内省を行い、体験の意味を解釈し、次の体験へと活かす一連の過程で、実際の体験と同様に重要視されている。野外教育におけるふりかえりは多くの場合グループで行われ、「班担当指導者：カウンセラー」によってリードされ、この班担当指導者は、グループの体験を整理するために「ファシリテーター：促進者」となり、メンバーがどのような体験をしたか、その体験からどのようなことを考えたかなど、お互いの気づきを分かち合う時間を大切にしている。この「わかちあい」は、「シェアリング」とも呼ばれている。「シェアリング」とは、個人の気づきや学びを同じ体験をしたグループのメンバーと報告し合い共有することで、気づきに広がりや深まりをもたせることができると考えられている。

本研究では、上記の「ふりかえり」をグループで行う話し合いを重視した「シェアリング」活動とし、静かにふりかえることの出来る雰囲気を大切にしたいと考え、ろうそくランタンを用いてテントにて行った。

シェアリングの内容については、

・キャンプ 2 日目・3 日目

個人として、またグループとして 1 日の活動をふりかえり、良かったところ、嬉しかったこと、上手いかなかったこと等を一人ずつ話す機会を設けた。個人の考えたことや感じたことをグループのメンバーにシェアして、次の日の活動に向けた改善や目標について話し合った。

また、グループ内のメンバー一人一人の良いところを見つけてグループでシェアすることを班担当カウンセラーが提案するなど、グループのメンバーが真剣に他者について考えたり観察したりする機会を設けた。

・キャンプ 4 日目

キャンプ 4 日目のふりかえりでは、キャンプ全体を通しての感想を中心にシェアリングを行った。また、キャンプとは直接的に関係はないが自分自身の悩みや過去の経験、将来のことなどを吐露する機会となった。

上記の内容は、個人として、またグループとして 1 日の活動（4 日目に関しては、キャンプ全体の感想）をふりかえることだが、そのふりかえりを通して自分自身の内面に目を向けていくような構造で行われた。

ふりかえりの一定の質を確保するために、

「資料 1 『シェアリング』（ふりかえり）の実施方法について」をカウンセラーに事前に配布した。そして、

- ・ 静かな雰囲気の中でシェアリングを進めること
- ・ カウンセラーがリードし、全員が話をするように進めること
- ・ 普段言えない悩みや不安などを他者に吐露する機会になるような雰囲気

気を作ること

といった実施に伴う注意事項について、事前に説明を行い、カウンセラーが共通認識し、グループごとに行われた。

実際にキャンプを終えた学生の感想文の内容を見ると、「シェアリング」が行われていた夜の「ふりかえり」について多く綴られていた。下記の内容は学生の感想文を一部抜粋したものである。

- ・普段あまり感じることもない雰囲気の中で話し合うことは、最初は恥ずかしくて変な感じだと思っていた。しかし、2日目・3日目と日が経つごとにその空気は変わっていき、話したいことが話せる時間になった。

- ・普通に生活していて知り合ったり、仲良くなったりすることはあり得ない人たちだったけど、何も知らない状態から始まったからこそ、その人についてより知ることが出来た。

- ・真剣な雰囲気だったので、1日の自分をしっかりと振り返れたし、普段は言えない本音や自分の意見を言える良い機会だった。

- ・相手の良いところを見つける、自分の良いところを見つけてもらえたことが自分を認めてもらえた気がして、言いたいことが言えるようになった。

- ・自分の悩みについて、出会って数日のメンバーに話すのは少し恥ずかしかったけど、このメンバーなら真剣に話を聞いてくれるという信頼と安心感があったからこそ正直に話すことができた。

こうした感想文の内容からも「シェアリング」することがキャンプ実習の活動や人との関わりに何らかの影響を与えていたことが考えられる。

資料1 「シェアリング」（ふりかえり）の実施方法について

「シェアリング」の実施方法について

■実施時と時間■

2日目夜・3日目夜・4日目夜の計3回。1回につき、90分程度の時間を確保する。

■進め方■

- ・1日の感想（4日目の夜は全体の感想）

【個人として】

- ・良かったこと、嬉しかったこと、上手くいかなかったこと

【グループとして】

- ・上手くできたこと、上手くできなかったこと
- ・明日への抱負

【個人として】と【グループとして】

- ・自分自身のこと

自分自身に関する悩み、今後自分をどう変えたいのか、自分の行動に納得しているのか、将来に向けて考えていること等。

■「ふりかえり」実施に伴う注意事項■

- ・キャンパー任せにせず、カウンセラーが話し合いをリードすること。
- ・ろうそくランタンを使用し、静かな雰囲気を保つこと。
- ・「静かにふりかえる時間を大切にしよう」という動機付けをしっかりと行うこと。

- ・指名する、順番に話させる等、全員が話をするように進めること。

その際、自由に発言できる場もあっていいが、特定の者だけが話をするようであれば、必要に応じてカウンセラーが発言を促す。

- ・カウンセラーの思いを押し付けない。

・深いところまで話が行かない場合（単に楽しかった、面白かった等）は、必要に応じてカウンセラーがテーマを設定したりカウンセラーから見たグループに対する感想などを言ったり、問題意識を与える。

（「このグループで私が足りないと感じているのは…」、「本当にみんなが満足しているとは思えない」等）

- ・キャンプ以外のことで、普段の自分自身について語ることも大切にして、普段言えない悩みや不安などを他者に吐露する機会になるような雰囲気を作る。（場合によっては、カウンセラーが自分の悩みを話す）

4. 検査および手続き

本研究では、キャンプ実習に参加した大学生に対して以下の2つの調査用紙を使用し、分析を行った。また、キャンプ2日目から4日目まで毎日行われた各グループの「シェアリング」場面における参加者のふりかえりの発言音声をボイスレコーダーに収録した。内容及び手続きは以下の通りである。

1) 信頼感

キャンプ実習参加前後の信頼感の変化を見るために、天貝（1995）³⁾によって作成された24項目からなる信頼感尺度を採用した。（巻末資料1）この検査は対人的信頼感を多次元的に測定するための尺度であり、採点方法は各項目について、「非常によくあてはまる」、「あてはまる」、「少しあてはまる」、「余りあてはまらない」、「あてはまらない」、「全くあてはまらない」の順に6点、5点、4点、3点、2点、1点の得点を与えている。3つの因子ごとに項目の回答得点を単純計算し、因子得点とする。信頼感は次の3つの因子に分けられる。1つ目は「自分への信頼（6項目）」因子で、この因子は得点が高いほど自分自身に対する信頼が高い傾向があることを意味する。2つ目は「他人への信頼（8項目）」因子で、この因子は得点が高いほど他人や周りの人間に対する信頼が高い傾向にあることを意味する。3つ目は「不信（10項目）」因子で、この因子は逆転項目により得点が高いほど他人や周りの人間に対しての不信感が低い傾向にあることを意味する。このことから本研究では、「不信（逆

転)」因子と記述していく。この検査をキャンプ実習参加前、キャンプ実習参加直後、キャンプ実習参加 1 ヶ月後の計 3 回実施した。

2) 自己開示性

キャンプ実習参加前後の自己開示性の変化を見るために、末永(1987)²⁴⁾が作成した自己開示行動自己評価尺度 15 項目を採用した。(補足資料 2) 採点方法は、「よくあてはまる」、「あてはまる」、「どちらともいえない」、「あてはまらない」、「全くあてはまらない」の順に 5 点、4 点、3 点、2 点、1 点の得点を与えている（一部逆転項目が含まれている）。

得点が高いほど自己開示性が高く、他人に自分のことを開示しやすい傾向にあることを意味する。この検査をキャンプ実習参加前、キャンプ実習参加直後、キャンプ実習参加 1 ヶ月後の計 3 回実施した。

3) ふりかえり場面の音声データ収集

キャンプ初日を除くキャンプ 2 日目、キャンプ 3 日目、キャンプ 4 日目の夜に各グループで行われたシェアリングにおける参加者の発言をボイスレコーダーを用いて音声収録した。ボイスレコーダーは各グループ 1 台とし、テント内の中央に置くように指示した。音声の収録はキャンプ 2 日目からキャンプ 4 日目にかけて各グループ合計 3 回実施した。各グループのシェアリングは 1 回 1 時間から 1 時間 30 分とし、音声を録音した。

4) ふりかえり発言チェックリスト

キャンプ参加者のキャンプ初日を除くキャンプ2日目、キャンプ3日目、キャンプ4日目の夜に各グループで行われたシェアリングにおける参加者の発言を収録した音声を客観的に分析するために「ふりかえり発言チェックリスト」を作成し、データの収集を行った。

データ収集の手順を以下に示す。

① カテゴリーの設定

参加者の発言内容を明らかにするために、シェアリングの音声データから無作為に抽出した3回分の逐語記録を行い、発言の分類を整理した結果、25個のカテゴリーの発言パターンを得ることができ、チェックリストを作成した。(巻末資料3)さらに、全ての音声データをカテゴライズした後に類似項目の統合や出現頻度が極端に低いカテゴリーを削除等を行い、17個のカテゴリーを抽出した。各カテゴリーの内容を表3に示す。さらに、17個のカテゴリーから類似項目を統合し、大カテゴリーとして7個のカテゴリーを設定し、分析を行った。このカテゴリーの整理に当たっては、高橋(1991)²⁶⁾の体育授業における教師の言語行動を観察するために作成されたALT-PE観察法や九町(2010)²⁷⁾のキャンプ行動ビデオ分析チェックリスト作成の研究を参考にした。

②時間見本法の設定

シェアリングで収録された音声に関して、作成したカテゴリー分類のチェックリストに沿って、時間見本法を用いて発言を記録することとした。時間見本法とは、あらかじめ決めた時間間隔で区切った聞き取り単位を設定し、聞き取り単位ごとに分析対象者の発言の生起を記録する方法である。

発言のチェックをする際に重要な聞き取り単位の時間間隔と分析時間については、分析対象者の発言や場面が適したものを設定しなければならない。シェアリング場面においては、発言する対象者によって話スピードが異なるため、聞き取り単位の時間間隔が短いほど正確な分析にはなるが、あまりに短いと1回の発言中に次々と聞き取り単位を迎えてしまう。本研究では、1回の発言が複数のカテゴリーを含む場合を考え、チェック項目に記録が被らないように5秒間を分析時間とした。5秒間連続して分析を行い、生起した発言をチェックリストに記録するという作業を繰り返し、グループ1班あたり1時間から1時間30分のデータを3回分収集した。発言していない時間およびカテゴリーに含まれない発言は空白とした。

③分析者

これらの発言分析には、キャンプ中に班担当カウンセラーとしてシェアリングを行った大学生もしくは大学院生が聞き取りを行い、後に筆者が聞き取り確認を行った。聞き取りが客観的に行われるよう発言分析の方法と手順を筆者が口頭で説明し、発言の分類を定義した各カテゴリーの内容を示した表3を基に聞き取りを行うこととし、記録の正確さの検

討を行った。

④データの得点化

本チェックリストでは、シェアリングが行われた時間にチェックされたグループごとの記録からチェック項目をカウントし、個人およびグループ全体の発言合計時間（秒）を算出した。グループによってシェアリングの実施時間にばらつきがあるため、全て60分換算で示すこととし、個人の発言時間（秒）を算出した。

表3 各カテゴリーの内容および例

カテゴリー別		カテゴリーの説明	例
肯定的評価		☆肯定的な発言	
肯定的評価	自己評価	☆肯定的に自己を評価する発言	「火起こしができた」「前向きな発言ができた」「成長できた」
	他者評価	☆肯定的に他者を評価する発言	「この班の〇〇がよかった」「〇〇さんが頑張っていた」
否定的評価		☆否定的な発言	
否定的評価	自己評価	☆否定的に自己を評価する発言	「人任せで頼り過ぎていた」「自分の意見が出せない」
	他者評価	☆否定的に他者を評価する発言	「話し合いを始めるのが遅かった」「役割が被っていた」
改善・提案		☆改善や提案に関する発言	
改善提案	目標・方向性	☆個人や班の目標や方向性についての発言	「〇〇な班にしたい」「自分から動いていきたい」
	提案・助言	☆自分の意見を提案したり助言したりする発言	「〇〇をやってみよう」「〇〇してみるといいよ」
肯定的感情		☆肯定的な感情を表す発言	
肯定的感情	肯定感情（受容・共感）	☆受容・共感などの喜びの感情を表す発言	「褒められてうれしかった」「領域を気にせず打ち解けられる」
	感謝の気持ち	☆感謝を表す発言	「すぐ助けてくれてありがとう」「ありがとう」
自分自身		☆自分自身についての発言	
自分自身	性格	☆自分の性格をさらけ出す発言	「自分はもともと〇〇な性格で…」
	過去経験	☆現在より過去の様々な経験や体験についての発言	「昔いじめにあっていた」「受験に失敗して…」
	その他（性格、過去経験以外）	☆性格・過去経験に含まれない自分自身についての発言	家族や恋人などについて
日常転化		☆日常や将来に向けての発言	
日常転化	今後の日常	☆キャンプ後の日常生活の目標などに関する発言	「人とのつながりを大切にしたい」「日常に戻っても〇〇したい」
	将来展望	☆将来の夢や未来のことについての発言	将来の夢 「教師になるためにもっと色んな経験をしていきたい」
その他		☆発問・進行・同意賛同・励ましなどの発言	
その他	発問	☆メンバーの気づきを広げるために行う発言	「次は〇〇について考えてみよう」「みんなはどう思ってる？」
	進行	☆ふりかえりが円滑に進むように手助けするような発言	「次は〇〇さんが話してみよう」
	同意賛同	☆意見や求めなどに対して賛成・承諾・賛同する発言	「私もそう思う」「その意見良いと思うよ」
	励まし	☆元気や勇気が出るような声掛け	「大丈夫」「協力して頑張っていこう」

5. 統計処理

本研究では課題を検討するにあたり、下記の統計処理を行った。

1) 信頼感については、合計得点および各因子得点において、参加者全体とキャンプ実習参加前の信頼感合計得点によって分けられた群ごとに分散分析および Fisher の多重比較 (LSD) を用い、キャンプ実習参加前、キャンプ実習参加直後、キャンプ実習参加 1 ヶ月後の有意差を検討した。

2) 自己開示性については、合計得点において、参加者全体とキャンプ実習参加前の自己開示性得点によって分けられた群ごとに分散分析および Fisher の多重比較 (LSD) を用い、キャンプ実習参加前、キャンプ実習参加直後、キャンプ実習参加 1 ヶ月後の有意差を検討した。

3) シェアリングの発言内容については、得られた音声データから、参加者の発言合計時間および各カテゴリーの平均値を算出した。発言合計時間および各カテゴリーの平均値を分散分析および Fisher の多重比較 (LSD) を用い、キャンプ 2 日目、キャンプ 3 日目、キャンプ 4 日目の有意差を検討した。

また、キャンプ前後の自己開示性の変化量による発言合計時間および各カテゴリーの平均値を分散分析および多重比較 (LSD) を用い、キャンプ 2 日目、キャンプ 3 日目、キャンプ 4 日目の有意差を検討した。

4) 上記の統計処理においては、IBM SPSS Statistics27を用いて分析を行った。

6. 倫理的配慮

参加者には調査で得られた情報は匿名が保たれること、調査結果は研究発表、論文発表の形で公表されるが個人が特定されるような情報は提示されないよう最大限配慮することを口頭にて説明し、同意を得たうえで調査を行った。

第 三 章

結果および考察

本研究の目的は、大学キャンプ実習が参加者の信頼感および自己開示性に及ぼす影響を明らかにすることである。また、シェアリングにおける発言内容との関連についても検討する。

そのために、以下の 5 つの課題を設定し、分析し、記述していくこととする。

課題 1 : キャンプ実習参加者の信頼感の変容に及ぼす影響を検討する。

課題 2 : キャンプ実習参加者の自己開示性の変容に及ぼす影響を検討する。

課題 3 : キャンプ実習参加者の信頼感と自己開示性の関連を検討する。

課題 4 : キャンプ実習参加者のシェアリングにおける発言内容の変容を検討する。

課題 5 : 大学キャンプ実習参加者の自己開示性とシェアリングの関連を検討する。

1. 信頼感の変化

1) 参加者全体の変化

参加学生の信頼感合計得点および信頼感因子別得点のキャンプ実習参加前、キャンプ実習参加後、キャンプ実習参加 1 ヶ月後の変化を見るために、一元配置分散分析および多重比較 (LSD) を用いて分析した。因子得点については因子合計得点を項目数で割った値を使用している。

信頼感合計得点と各因子の得点の変化を表 4 と図 2、図 3 に示した。一元配置分散分析の結果、信頼感合計得点は、1% 水準の有意差がみられた。

信頼感合計得点は、多重比較の結果、キャンプ前 ($M=100.86$ $SD=13.91$) からキャンプ直後 ($M=105.12$ $SD=12.41$) にかけて得点が向上し 5% 水準で有意差が認められた。キャンプ前とキャンプ 1 ヶ月後 ($M=106.02$ $SD=13.51$) の比較でも、0.1% 水準で有意差が認められ、1 ヶ月後まで、その向上が維持されていたと考えられる。

信頼感は次の 3 つの因子に分けられる。1 つ目は「自分への信頼」因子で、この因子は得点が高いほど自分自身に対する信頼が高い傾向があることを意味する。2 つ目は「他人への信頼」因子で、この因子は得点が高いほど他人や周りの人間に対する信頼が高い傾向にあることを意味する。3 つ目は「不信 (逆転)」因子で、この因子は逆転項目により得点が高いほど他人や周りの人間に対しての不信感が低い傾向にあることを意味する。これらの 3 つの因子得点の変化について、一元配置分散分析及び多重比較を用いて検討した。なお、因子得点は 6 点満点に換算して

いる。

「自分への信頼」因子では多重比較の結果、キャンプ直後にかけて有意差は認められなかったが、キャンプ前から1ヶ月後にかけて5%水準で有意差が認められ、得点の向上が認められた。

「他人への信頼」因子では、多重比較の結果、キャンプ前から直後にかけて有意な向上(1%水準)が認められ、キャンプ前から1ヶ月後にかけても有意な向上(5%水準)が認められ、キャンプ直後得点が向上し、1ヶ月後にかけてその向上が維持されていることが明らかとなった。

「不信(逆転)」因子では、キャンプ直後にかけて10%水準で向上(不信軽減)する傾向がみられた。キャンプ前から1ヶ月後にかけては、5%水準で向上(不信軽減)していた。

3つの因子得点全てでキャンプ前から1ヶ月後にかけて有意な得点向上が認められたことからキャンプ実習参加経験が自分および他人への信頼感の向上に影響していることが明らかとなった。

表4 信頼感合計得点および因子別得点の変化

N=50	一元配置分散分析				多重比較(LSD)	
	キャンプ前 M(SD)	直後 M(SD)	1ヶ月後 M(SD)	F値	前一直後 平均の差	前-1ヶ月後 平均の差
信頼感合計	100.86 (13.91)	105.12 (12.41)	106.02 (13.51)	7.514**	-4.26*	-5.16***
自分への信頼因子	4.37 (0.69)	4.38 (0.65)	4.55 (0.67)	3.003+	-0.01	-0.18*
他人への信頼因子	4.48 (0.69)	4.74 (0.60)	4.67 (0.66)	5.271**	-0.26**	-0.19*
不信(逆転)因子	3.88 (0.73)	4.10 (0.72)	4.14 (0.96)	2.919+	-0.21+	-0.26*

※ 因子得点は6点満点に換算 +P<.10 *P<.05 **P<.01 ***P<.001

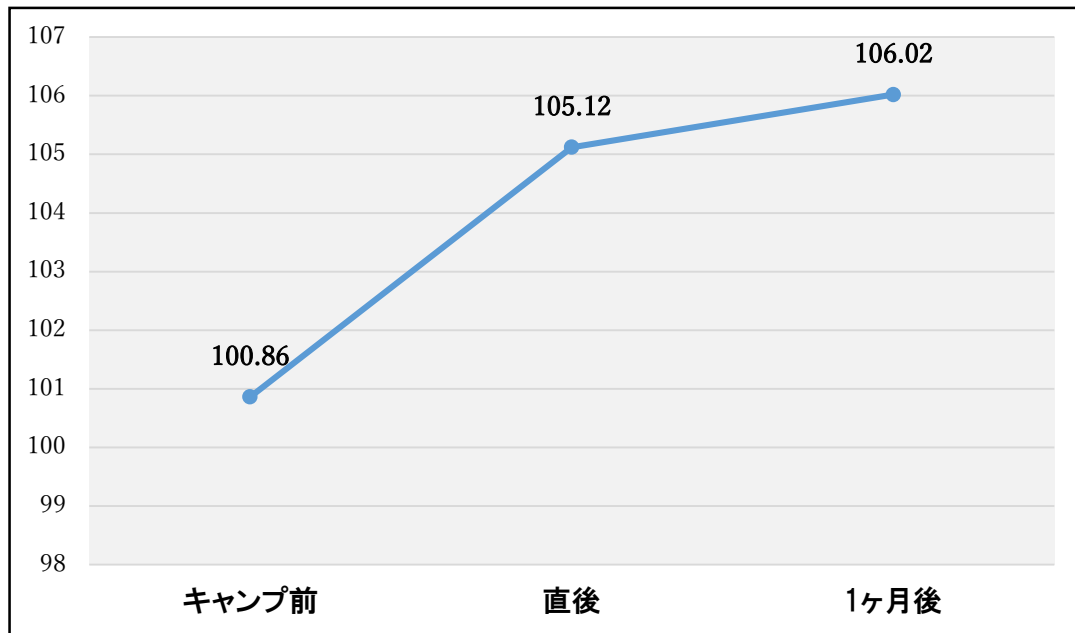


図 2 信頼感合計得点の変化

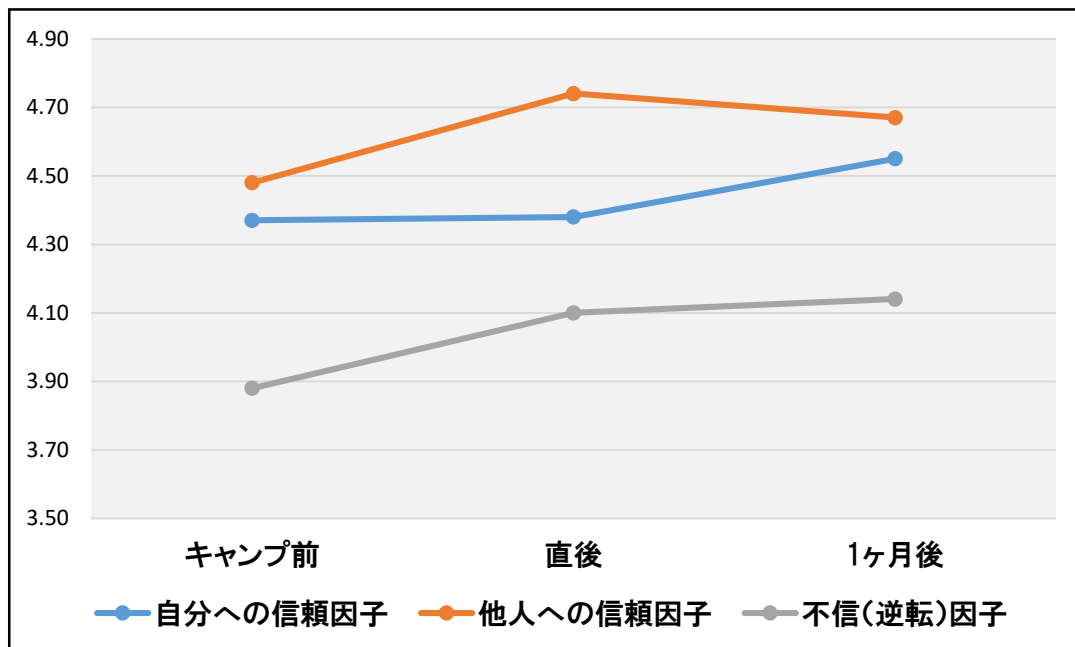


図 3 信頼感の各因子得点の変化

2) 信頼感合計得点群別の変化の違い

キャンプ実習参加前の信頼感合計得点が高かった者と低かった者によって変化の違いがあるのかを検討するため、キャンプ前に得られた信頼感合計得点を算出し、その合計得点により 3 つの群に分けて検討した。合計得点の範囲および人数は以下の通りである（表 5）。

表 5 各群の合計得点の分布

N=50	N(人)	合計得点範囲(点)
キャンプ前得点 上位群	17	106～135
キャンプ前得点 中位群	17	92～105
キャンプ前得点 下位群	16	70～91

キャンプ実習参加前の信頼感の合計得点が高い群を「上位群(N=17)」、低い群を「下位群(N=16)」、その中間の群を「中位群(N=17)」とした。信頼感合計得点群別にキャンプ実習参加前、キャンプ実習参加直後、キャンプ実習参加 1 ヶ月後の変化を見るために、一元配置分散分析および多重比較（LSD）を用いて分析した。

信頼感合計得点の変化を表 6 と図 4 に示した。一元配置分散分析の結果、上位群は有意差が認められなかったが、中位群と下位群では 1% 水準で有意差が認められた。

多重比較の結果、上位群において有意差は認められなかった。中位群においてはキャンプ前 ($M=99.53$ $SD=3.88$) からキャンプ直後 ($M=105.53$ $SD=9.22$) にかけて得点が向上し、1%水準で有意差が認められた。さらにキャンプ前とキャンプ 1 ヶ月後 ($M=105.82$ $SD=10.56$) の比較でも得点の向上が見られ、5%水準で有意差が認められた。下位群においてもキャンプ前 ($M=85.75$ $SD=5.09$) からキャンプ直後 ($M=96.31$ $SD=13.47$) にかけて得点が向上し、1%水準で有意差が認められた。またキャンプ前とキャンプ 1 ヶ月後 ($M=94.00$ $SD=10.30$) の比較でも得点の向上が見られ、1%水準で有意差が認められた。

二元配置分散分析の結果、信頼感合計得点の変化には信頼感群と時期による交互作用 ($P<.01$) が認められ、信頼感群による変化の仕方に有意な差があることが明らかとなった。

信頼感合計得点群別の信頼感合計得点の変化の分析から中位群、下位群において信頼感が向上し、その向上はキャンプ 1 ヶ月後まで維持されており、元々信頼感が低かった者ほどキャンプ参加後に向上することが明らかとなった。

表 6 合計得点群別の信頼感合計得点の変化

信頼感群	一元配置分散分析				多重比較(LSD)		二元配置分散分析		
	キャンプ前 M(SD)	直後 M(SD)	1ヶ月後 M(SD)	F値	前→直後 平均の差	前→1ヶ月後 平均の差	時期	信頼感群	群×時期 交互作用
上位群 N=17	116.41 (8.12)	113.00 (8.56)	117.53 (7.91)	3.08+	3.41	-1.12	8.99***	45.06***	4.83**
中位群 N=17	99.53 (3.88)	105.53 (9.22)	105.82 (10.56)	6.58**	-6.00**	-6.29*			
下位群 N=16	85.75 (5.09)	96.31 (13.47)	94.00 (10.30)	7.11**	-10.56**	-8.25**			

+P<.10 *P<.05 **P<.01 ***P<.001

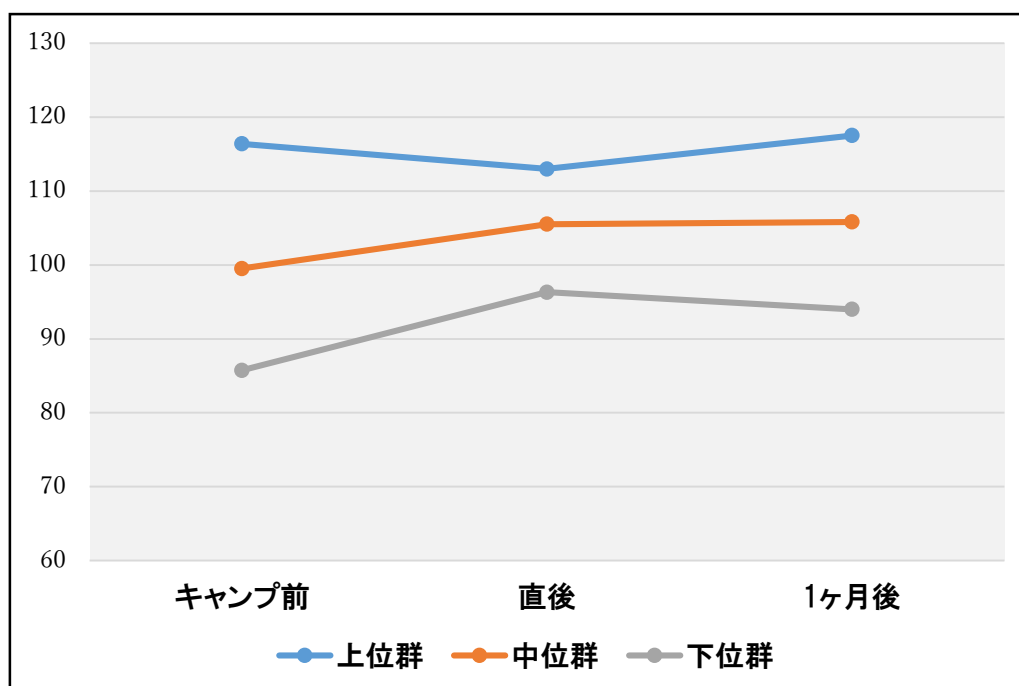


図 4 合計得点群別 信頼感合計得点の変化

信頼感合計得点群別の各因子得点の変化について一元配置分散分析および多重比較（LSD）を用いて分析した。その結果を表 7 ～ 9 と図 5 ～ 7 に示した。因子得点は 6 点満点に換算している。

上位群においては、「自分への信頼」、「他人への信頼」、「不信（逆転）」の全ての因子で有意な得点の向上は認められなかった。

中位群においては、「不信（逆転）」因子でキャンプ直後に得点の向上（不信の軽減）が 5%水準で認められ、1 ヶ月後まで維持される傾向が見られた。

下位群においては、「他人への信頼」因子と「不信（逆転）」因子においてキャンプ前からキャンプ直後にかけて有意な得点の向上が認められ、「他人への信頼」因子では得点向上は 1 ヶ月後まで維持されていることが明らかとなった。また下位群では「自分への信頼」因子がキャンプ前、直後、1 ヶ月後と得点が向上し、キャンプ前と 1 ヶ月後の変化には 5%水準で有意差が認められた。

元々信頼感得点が低かった下位群に着目すると、キャンプ実習参加経験が普段の大学生活に戻った 1 ヶ月後にかけて、「他人への信頼」因子や「自分への信頼」因子の向上に影響を及ぼしたと考えられる。

表 7 合計得点群別の「自分への信頼」因子得点の変化

信頼感群	一元配置分散分析				多重比較(LSD)		二元配置分散分析		
	キャンプ前 M(SD)	直後 M(SD)	1ヶ月後 M(SD)	F値	前一直後 平均の差	前-1ヶ月後 平均の差	時期	信頼感群	群×時期 交互作用
上位群 N=17	4.97 (0.48)	4.73 (0.55)	4.95 (0.51)	1.69	0.25*	0.02	3.20*	11.87***	1.77
中位群 N=17	4.22 (0.61)	4.31 (0.71)	4.38 (0.68)	1.07	-0.10	-0.17			
下位群 N=16	3.90 (0.50)	4.08 (0.56)	4.30 (0.64)	3.30+	-0.19	-0.41*			

※ 因子得点は 6 点満点に換算

+P<.10 *P<.05 ***P<.001

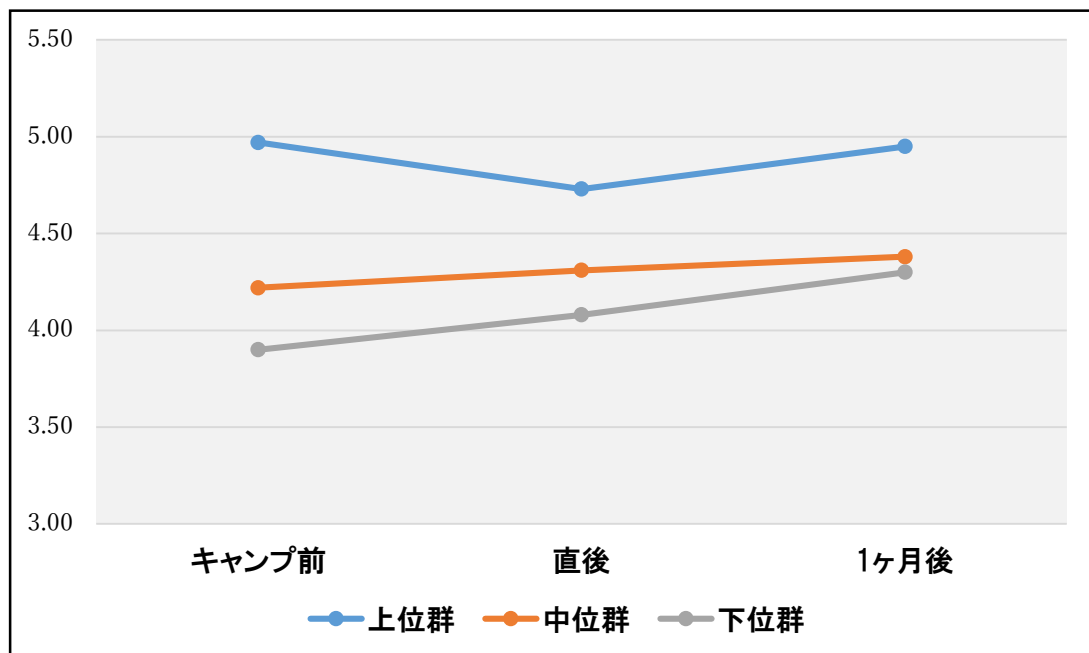


図 5 合計得点群別 「自分への信頼」因子得点の変化

表 8 合計得点群別の「他人への信頼」因子得点の変化

信頼感群	一元配置分散分析				多重比較(LSD)		二元配置分散分析		
	キャンプ前 M(SD)	直後 M(SD)	1ヶ月後 M(SD)	F値	前一直後 平均の差	前-1ヶ月後 平均の差	時期	信頼感群	群×時期 交互作用
上位群 N=17	5.02 (0.43)	5.05 (0.44)	5.01 (0.36)	0.09	-0.03	0.01	5.67**	24.24***	1.83
中位群 N=17	4.59 (0.52)	4.82 (0.49)	4.82 (0.58)	1.81	-0.23	-0.24			
下位群 N=16	3.78 (0.44)	4.31 (0.65)	4.14 (0.69)	5.14*	-0.53**	-0.36*			

※ 因子得点は 6 点満点に換算

* $P < .05$ ** $P < .01$ *** $P < .001$

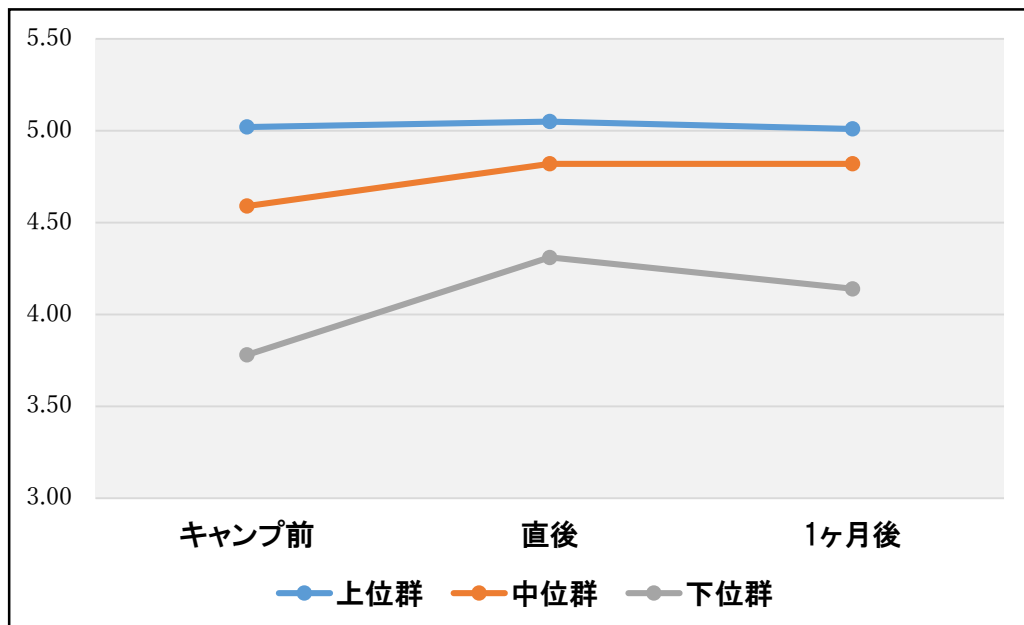


図 6 合計得点群別 「他人への信頼」因子得点の変化

表 9 合計得点群別の「不信（逆転）」因子得点の変化

信頼感群	一元配置分散分析				多重比較(LSD)		二元配置分散分析		
	キャンプ前 M(SD)	直後 M(SD)	1ヶ月後 M(SD)	F値	前一直後 平均の差	前-1ヶ月後 平均の差	時期	信頼感群	群×時期 交互作用
上位群 N=17	4.64 (0.59)	4.42 (0.53)	4.78 (0.66)	3.44*	0.22	-0.14	3.13*	22.31***	2.24+
中位群 N=17	3.75 (0.18)	4.11 (0.48)	4.09 (0.75)	3.61*	-0.36*	-0.34+			
下位群 N=16	3.21 (0.42)	3.73 (0.93)	3.51 (1.04)	1.83	-0.52+	-0.29			

※ 因子得点は 6 点満点に換算

+P<.10 *P<.05 ***P<.001

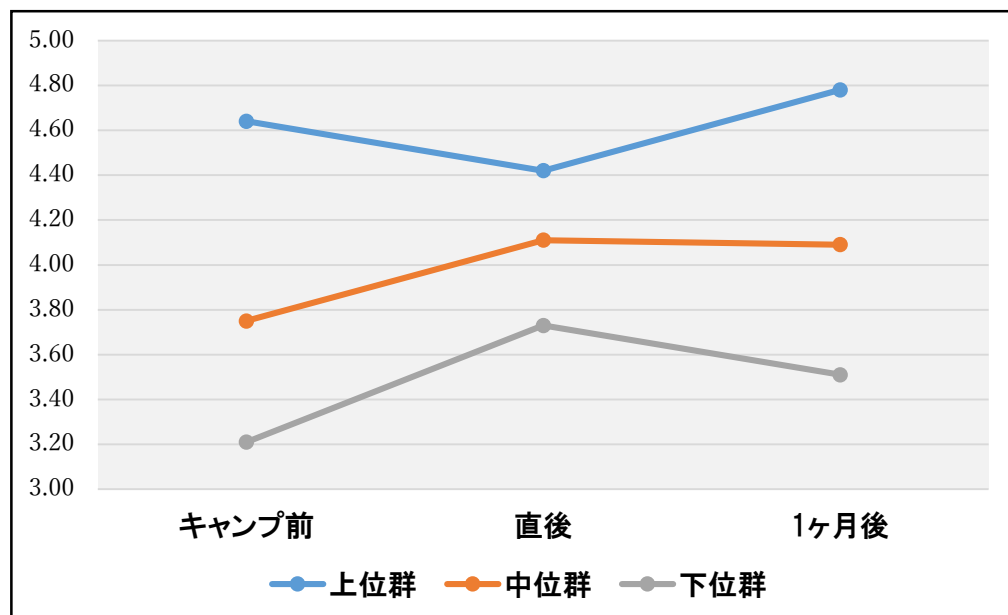


図 7 合計得点群別 「不信（逆転）」因子得点の変化

3) まとめ

信頼感合計得点は、キャンプ前からキャンプ直後にかけて得点が向上し、キャンプ 1 ヶ月後までその向上が維持されていることが明らかとなった。

また、「自分への信頼」因子ではキャンプ直後にかけて有意な変化は認められなかったが、キャンプ前から 1 ヶ月後にかけて得点の向上はみられた。「他人への信頼」因子では、キャンプ前から直後にかけて有意な得点の向上が認められ、1 ヶ月後にもその向上が維持されていることが明らかとなった。「不信（逆転）」因子においても、キャンプ直後にかけて得点が向上（不信軽減）する傾向がみられ、1 ヶ月後にもその向上（不信軽減）が維持されていた。3 つの因子得点全てでキャンプ前から 1 ヶ月後にかけて有意な得点向上が認められたことからキャンプ実習参加経験が自分および他人への信頼感の向上に影響していることが明らかとなった。

信頼感合計得点群別の信頼感合計得点の変化では中位群、下位群においてキャンプ直後に信頼感が向上し、その向上はキャンプ 1 ヶ月後まで維持されることが明らかになった。信頼感の各因子得点の変化では、元々信頼感が高かった上位群では 3 つの因子全てで変化がなく、中位群では「不信（逆転）」因子、下位群では「他人への信頼」因子でキャンプ直後に得点が向上し、1 ヶ月後までその向上が維持されることが明らかとなった。元々信頼感得点が低かった下位群に着目すると、キャンプ実習参加経験が普段の大学生活に戻った 1 ヶ月後にかけて、「他人への信頼」因子や「自分への信頼」因子の向上に影響を及ぼしたと考えられる。

2. 自己開示性の変化

1) 参加者全体の変化

参加学生の自己開示性得点のキャンプ実習参加前後、キャンプ実習参加1ヶ月後の変化を見るために、一元配置分散分析および多重比較(LSD)を用いて分析した。

自己開示性得点の変化を表10と図8に示した。一元配置分散分析の結果、有意差はみられなかった。

多重比較の結果でも、キャンプ前からキャンプ直後にかけて有意な変化は認められなかった。

表 10 自己開示性得点の変化

N=50	一元配置分散分析				多重比較(LSD)	
	キャンプ前 M(SD)	直後 M(SD)	1ヶ月後 M(SD)	F値	前一直後 平均の差	前-1ヶ月後 平均の差
合計	50.90 (6.55)	51.86 (6.88)	51.52 (7.12)	0.912	-0.96	-0.62

N. S.

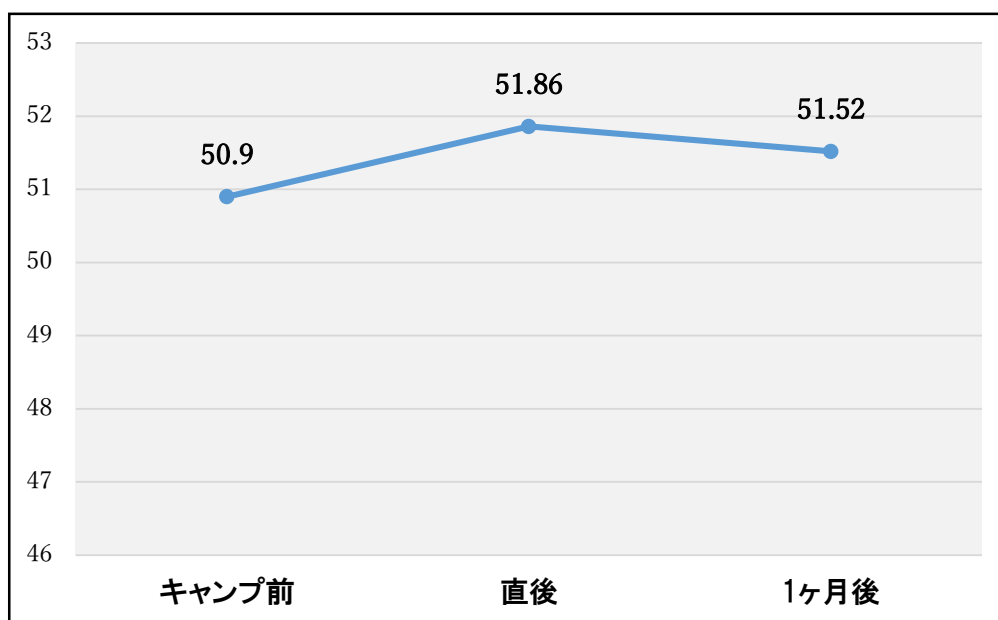


図 8 自己開示性得点の変化

2) 自己開示性得点群別の変化の違い

キャンプ実習参加前の自己開示性合計得点が高かった者と低かった者によって変化の違いがあるのかを検討するために、キャンプ前に得られた自己開示性得点を算出し、その合計得点より3つの群に分けて検討した。合計得点の範囲および人数は以下の通りである（表11）。

表 1 1 各群の合計得点の分布

N=50	N(人)	合計得点範囲 (点)
キャンプ前得点 上位群	18	53～68
キャンプ前得点 中位群	18	47～52
キャンプ前得点 下位群	14	39～46

キャンプ実習参加前の自己開示性の合計得点が高い群を「上位群(N=18)」、低い群を「下位群(N=14)」、その中間の群を「中位群(N=18)」とした。自己開示性得点群別にキャンプ実習参加前、キャンプ実習参加直後、キャンプ実習参加1ヶ月後の変化を見るために、一元配置分散分析および多重比較(LSD)を用いて分析した。

自己開示性得点の変化を表12と図9に示した。一元配置分散分析の結果、上位群と中位群では有意な変化は見られなかった。

下位群では5%水準で有意差が認められ、この変化はキャンプ直後、1ヶ月後にかけて得点が向上したことによる有意差であった。

多重比較の結果、下位群においてキャンプ前 (M=44.00 SD=2.29) から
 キャンプ直後 (M=46.57 SD=4.82) にかけて得点が向上し、5%水準で有意
 差が認められた。さらにキャンプ前とキャンプ1ヶ月後 (M=47.00
 SD=5.78) の比較でも得点の向上が見られ、5%水準で有意差が認められ
 た。

二元配置分散分析の結果、自己開示性得点の変化には自己開示群と時
 期による交互作用に有意傾向 ($P<.10$) がみられた。

この結果から、自己開示性の低かった下位群において自己開示性が向
 上し、その向上はキャンプ1ヶ月後まで維持されることが明らかになっ
 た。

表 1 2 自己開示性得点群別の自己開示性得点の変化

自己開示群	一元配置分散分析				多重比較(LSD)		二元配置分散分析		
	キャンプ前 M(SD)	直後 M(SD)	1ヶ月後 M(SD)	F値	前一直後 平均の差	前-1ヶ月後 平均の差	時期	自己開示群	群×時期 交互作用
上位群 N=18	57.89 (4.71)	56.67 (6.62)	56.06 (6.99)	1.05	1.22	1.83	1.25	26.20***	2.32+
中位群 N=18	49.28 (1.97)	51.17 (5.93)	50.50 (5.64)	1.46	-1.89	-1.22			
下位群 N=14	44.00 (2.29)	46.57 (4.82)	47.00 (5.78)	3.60*	-2.57*	-3.00*			

+ $P<.10$ * $P<.05$

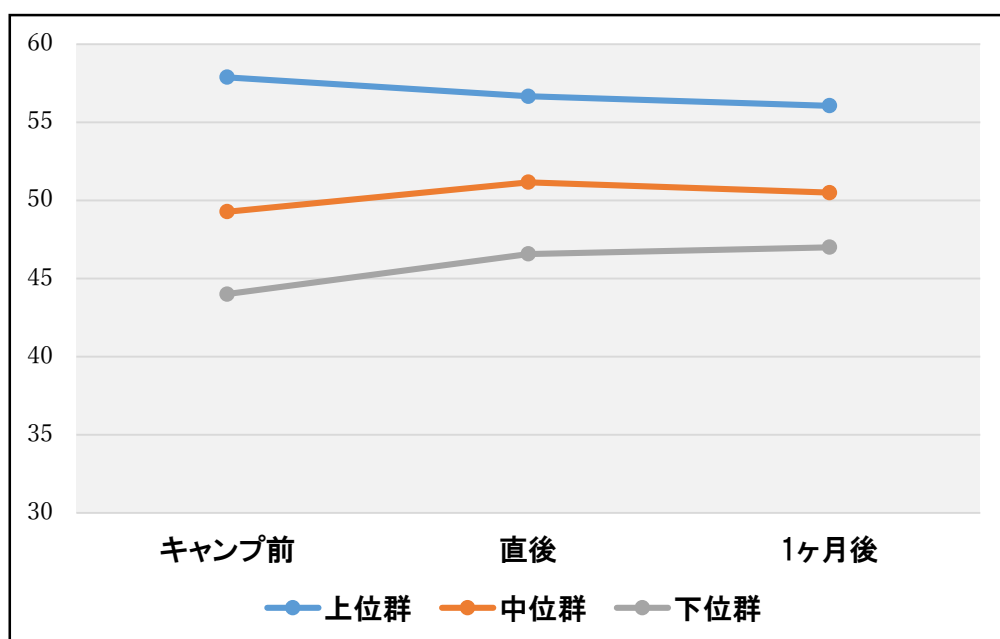


図 9 自己開示性得点群 自己開示性得点の変化

3) まとめ

自己開示性得点の変化では、キャンプ前からキャンプ直後にかけて大きな変化は認められなかった。

自己開示性得点別の自己開示性得点の変化では上位群と中位群には大きな変化は見られなかった。下位群においては 5% 水準で有意差が認められ、この変化はキャンプ直後、1 ヶ月後にかけて得点が向上したことによる有意差であった。

このことから、元々自己開示性の低かった下位群において自己開示性が向上し、その向上はキャンプ 1 ヶ月後まで維持されることが明らかになった。

3. 信頼感と自己開示性の関連

1) 信頼感得点と自己開示性得点の相関

本研究では使用した2つの検査における関連性をみるために、自己開示性、信頼感のキャンプ参加前におけるそれぞれの得点についてピアソンの相関係数を求めた。表1-3はキャンプ参加前の自己開示性と信頼感の相関係数である。

自己開示性と信頼感の関連においては、正の相関($r=0.343$, $P<.05$)が認められ、自己開示性の得点が高いほど信頼感が高いことを示している。特に自己開示性と信頼感の「不信(逆転)」因子に相関($r=0.383$, $P<.01$)が認められた。ただし、自己開示性と「自分への信頼」、「他人への信頼」には有意な相関係数は認められず、自分や他人への信頼が高いほど、自分のことを他者に話す自己開示性が高まるといえないことが示唆された。

表1-3 自己開示性と信頼感の相関係数 (キャンプ参加前)

N=50	信頼感	自分への信頼	他人への信頼	不信(逆転)
自己開示性	0.343*	0.111	0.275	0.383**

* $P<.05$ ** $P<.01$

次にキャンプ参加前からキャンプ参加直後にかけて、得点の変化による関連性をみるために、自己開示性と信頼感それぞれの得点のキャンプ参加前後の変化量を算出し、ピアソンの相関係数を求めた。表 1 4 はキャンプ参加前後の変化量における自己開示性と信頼感の相関係数である。

自己開示性の変化量と信頼感の変化量の関連においては、正の相関 ($P < .01$) が認められ、キャンプ参加前後で信頼感が増加した者ほど自己開示性が高く変化していくことを示している。自己開示性と信頼感の「自分への信頼」因子、「不信（逆転）」因子に正の相関が認められた。

表 1 4 自己開示性と信頼感の相関（キャンプ参加前後の変化量）

N=50	信頼感	自分への信頼	他人への信頼	不信(逆転)
自己開示性	0.394**	0.367**	0.193	0.324*

* $P < .05$ ** $P < .01$

2) 自己開示性得点の変化群による分析

キャンプ参加前からキャンプ参加直後にかけての自己開示性得点の増加量が大きかった者と小さかった者、減少した者によって、信頼感合計得点変化の違いがあるのかを検討する。そのため、自己開示性得点に対してキャンプ参加直後の得点からキャンプ参加前の得点を引き、キャンプ参加前後の変化量を算出し、その変化量により3つの群に分けた。変化量の得点の範囲および人数は以下の通りである（表15）。

表15 自己開示性得点の変化量による群の得点分布

N=50	N(人)	得点の変化範囲(点)
向上大群	16	4～16
向上小群	17	0～3
減少群	17	-11～-1

キャンプ参加前からキャンプ参加直後にかけて自己開示性得点の向上が大きい群を「向上大群(N=16)」、向上が小さい群を「向上小群(N=17)」、得点が減少した群を「減少群(N=17)」とした。

自己開示性変化群別に信頼感合計得点の変化を見るために、分散分析および多重比較（LSD）を用いて分析した。信頼感合計得点の変化を表 16 と図 10 に示した。

多重比較の結果、自己開示性得点の向上大群において信頼感合計得点がキャンプ前 ($M=93.75$ $SD=13.88$) からキャンプ直後 ($M=103.44$ $SD=12.62$) にかけて得点が向上し、1%水準で有意差が認められた。さらにキャンプ前とキャンプ 1 ヶ月後 ($M=101.31$ $SD=14.31$) の比較でも得点の向上が見られ、1%水準で有意差が認められた。向上小群と減少群についてキャンプ前からキャンプ直後にかけて有意差は認められなかった。

二元配置分散分析の結果、信頼感合計得点の変化には自己開示性変化群と時期による交互作用が認められ、自己開示性の変化群による変化の仕方には有意な差があることが明らかとなった。

この結果から、自己開示性の変化量が大きかった向上大群においてキャンプ後に信頼感が向上し、その向上はキャンプ 1 ヶ月後まで維持されることが明らかになった。

表 1 6 自己開示性変化群別の信頼感合計得点の変化

	一元配置分散分析				多重比較(LSD)		二元配置分散分析		
	キャンプ前 M(SD)	直後 M(SD)	1ヶ月後 M(SD)	F値	前-直後 平均の差	前-1ヶ月後 平均の差	時期	自己開示 変化群	群×時期 交互作用
向上大群 N=16	93.75 (13.88)	103.44 (12.62)	101.31 (14.31)	7.82**	-9.69**	-7.56**	8.39***	1.97	3.12*
向上小群 N=17	102.59 (10.68)	106.47 (13.52)	105.12 (13.99)	1.49	-3.88	-2.53			
減少群 N=17	105.82 (14.76)	105.35 (11.62)	111.35 (10.87)	4.46*	0.47	-5.53**			

* $P < .05$ ** $P < .01$ *** $P < .001$

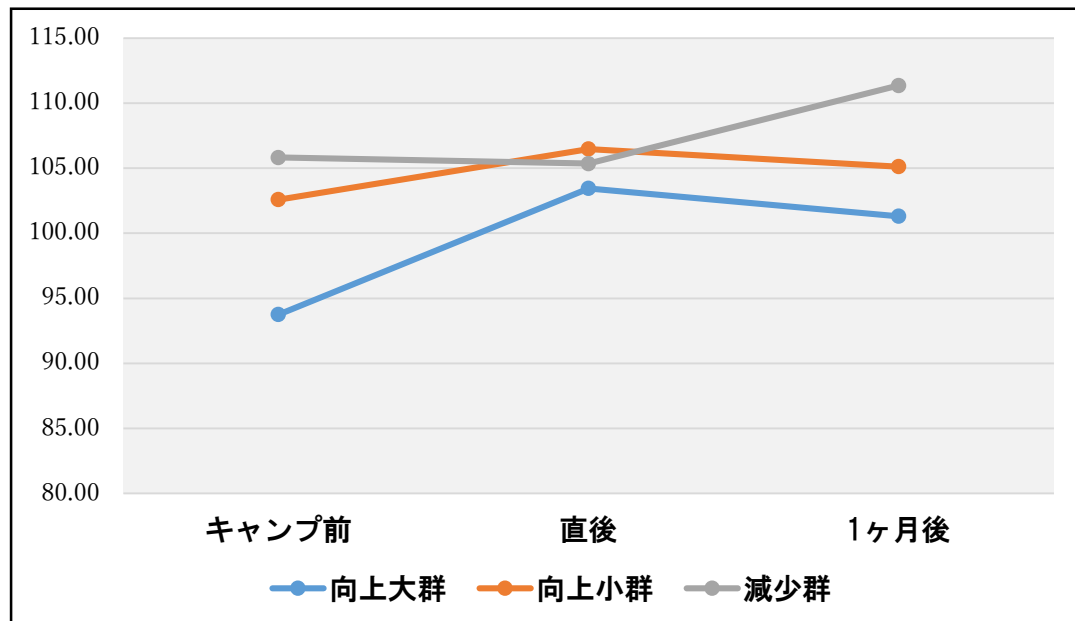


図 1 0 自己開示性変化群別 信頼感合計得点の変化

次に向上大群における信頼感の各因子得点の変化について分散分析および多重比較（LSD）を用いて分析した。その結果を表 17～19 と図 11～13 に示した。因子得点は 6 点満点に換算している。

向上大群においては、「自分への信頼」、「他人への信頼」、「不信（逆転）」の全ての因子においてキャンプ前からキャンプ直後にかけて有意な得点向上が認められた。「自分への信頼」、「不信（逆転）」因子では、キャンプ前から 1 ヶ月後にかけても有意な得点向上が認められ、得点向上は 1 ヶ月後まで維持されていることが明らかとなった。

向上小群においては「自分への信頼」、「他人への信頼」、「不信（逆転）」の全ての因子で有意な得点の向上は認められなかった。

減少群においては、「他人への信頼」因子でキャンプ直後に有意に得点が向上し（5%水準）、「自分への信頼」因子でキャンプ前から 1 ヶ月後にかけて得点が向上している。

これらの結果から、向上大群では「自分への信頼」、「不信（逆転）」因子で得点の向上が 1 ヶ月後まで維持されることが明らかとなり、自己開示性の向上と信頼感の向上に関連性が強いことが示唆された。

表 1 7 自己開示変化群別 「向上大群」の各因子得点の変化

向上大群 N=16	一元配置分散分析				多重比較(LSD)	
	キャンプ前 M(SD)	直後 M(SD)	1ヶ月後 M(SD)	F値	前-直後 平均の差	前-1ヶ月後 平均の差
信頼感合計	93.75 (13.88)	103.44 (12.62)	101.31 (14.31)	7.82**	-9.69**	-7.56**
自分への信頼	3.95 (0.67)	4.17 (0.72)	4.27 (0.63)	4.02*	-0.22*	-0.32*
他人への信頼	4.28 (0.84)	4.70 (0.66)	4.47 (0.64)	4.48*	-0.41*	-0.19
不信(逆転)	3.58 (0.71)	4.09 (0.79)	3.99 (0.94)	3.72*	-0.51*	-0.41*

※ 因子得点は 6 点満点に換算

* $P < .05$ ** $P < .01$

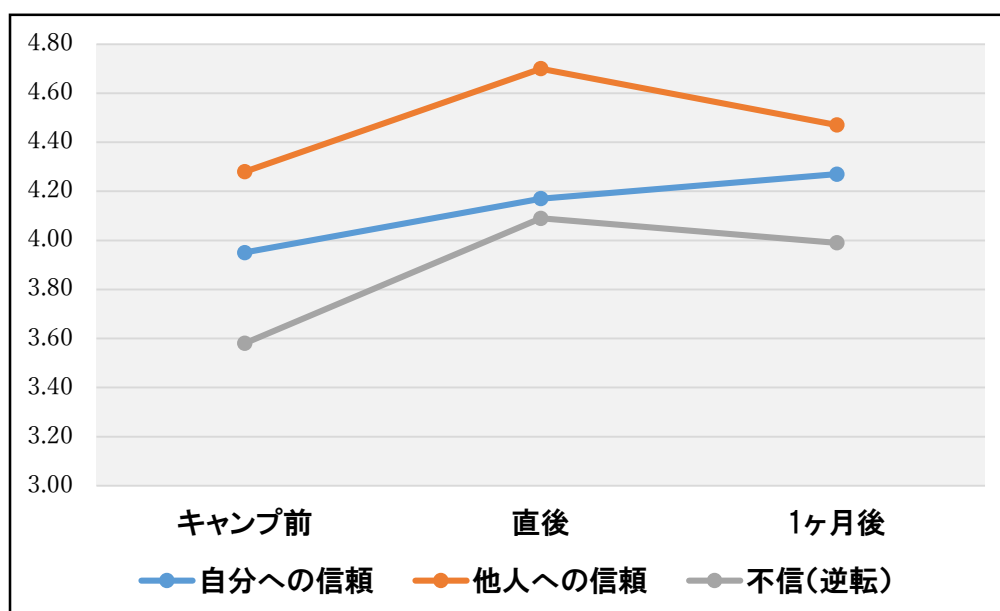


図 1 1 自己開示変化群別 「向上大群」の各因子得点の変化

表 1 8 自己開示変化群別 「向上小群」の各因子得点の変化

向上小群 N=17	一元配置分散分析				多重比較(LSD)	
	キャンプ前 M(SD)	直後 M(SD)	1ヶ月後 M(SD)	F値	前-直後 平均の差	前-1ヶ月後 平均の差
信頼感合計	102.59 (10.68)	106.47 (13.52)	105.12 (13.99)	1.49	-3.88	-2.53
自分への信頼	4.57 (0.59)	4.58 (0.72)	4.49 (0.64)	0.26	-0.01	0.08
他人への信頼	4.58 (0.54)	4.72 (0.62)	4.66 (0.72)	0.63	-0.14	-0.09
不信(逆転)	3.85 (0.55)	4.12 (0.71)	4.08 (0.87)	1.73	-0.27	-0.23

※ 因子得点は 6 点満点に換算

N. S.

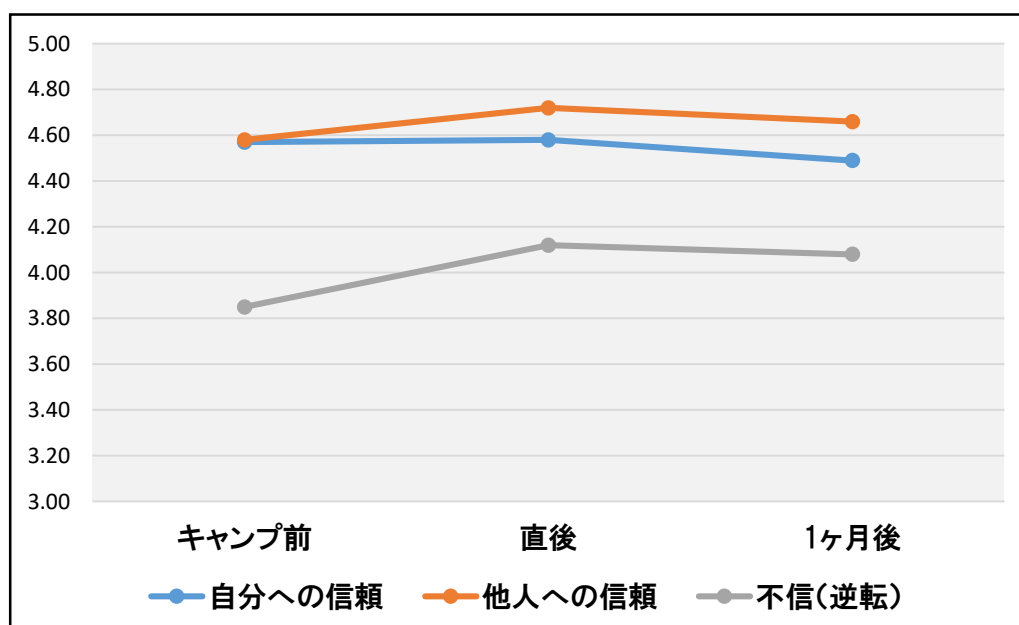


図 1 2 自己開示変化群別 「向上小群」の各因子得点の変化

表 1 9 自己開示変化群別 「減少群」の各因子得点の変化

減少群 N=17	一元配置分散分析				多重比較(LSD)	
	キャンプ前 M(SD)	直後 M(SD)	1ヶ月後 M(SD)	F値	前-直後 平均の差	前-1ヶ月後 平均の差
信頼感合計	105.82 (14.76)	105.35 (11.62)	111.35 (10.87)	4.46*	0.47	-5.53**
自分への信頼	4.57 (0.66)	4.38 (0.48)	4.87 (0.62)	5.12*	0.19	-0.30*
他人への信頼	4.56 (0.65)	4.79 (0.57)	4.85 (0.60)	1.83	-0.23*	-0.29
不信(逆転)	4.19 (0.82)	4.08 (0.70)	4.33 (1.10)	0.63	0.12	-0.14

※因子得点は6点満点に換算

* $P < .05$ ** $P < .01$

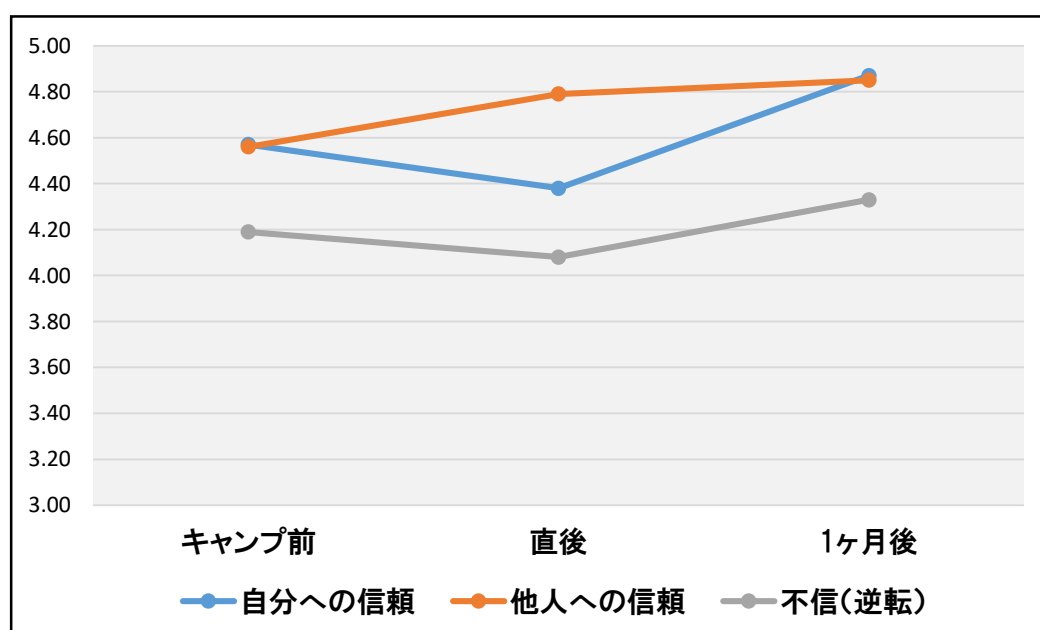


図 1 3 自己開示変化群別 「減少群」の各因子得点の変化

3) まとめ

ここでは、信頼感と自己開示性の関連をまとめる。

自己開示性と信頼感の関連においては、キャンプ参加前後の両者の得点に正の相関 ($r=0.343$, $P<.05$) が認められ、自己開示性の得点が高いほど信頼感が高いことを示している。特に自己開示性と信頼感の「不信（逆転）」因子に相関 ($r=0.383$, $P<.01$) が認められた。ただし、自己開示性と「自分への信頼」、「他人への信頼」には有意な相関係数は認められず、自分や他人への信頼が高いほど、自分のことを他者に話す自己開示性が高まるといえないことが示唆された。

次にキャンプ参加前後の自己開示性の変化による違いでは、自己開示性の変化量が大きかった向上大群において信頼感が向上し、その向上はキャンプ 1 ヶ月後まで維持されることが明らかになった。また、向上大群では「自分への信頼」、「不信（逆転）」因子で得点の向上が 1 ヶ月後まで維持されることが明らかとなり、自己開示性の向上と信頼感の向上に関連性が強いことが示唆された。

4. シェアリングにおける発言の分析

大学キャンプ実習参加学生のシェアリングの発言を測定する場面として、本研究では1日の活動の終わりに各班で行う「シェアリング」場面を設定した。そのシェアリング場面におけるキャンプ参加学生の発言の変容を分析した。

1) 音声データの収集

キャンプ初日を除くキャンプ2日目、キャンプ3日目、キャンプ4日目の夜に各班で行われたシェアリングにおける参加者の発言をボイスレコーダーを用いて音声収録した。ボイスレコーダーは各班1台とし、テント内の中央に置くように指示した。音声の収録はキャンプ2日目からキャンプ4日目にかけて各班合計3回実施した。各班のシェアリングは1回1時間から1時間30分の音声を録音した。

2) 分析方法

参加者の発言内容を明らかにするために、シェアリングの音声データから無作為に抽出した3回分の逐語記録を行い、発言の分類を整理した結果、7個のカテゴリーを設定し、ふりかえり発言チェックリストを作成した。

作成されたカテゴリー分類のチェックリストに沿って、5秒間を聞き取り時間とし、時間見本法を用いて発言を記録することとした。チェックされた班ごとの記録からチェック項目をカウントし、個人の合計発言時

間（秒）を算出した。グループによってシェアリングの実施時間にばらつきがあるため、すべて 60 分換算で示すこととし、個人の発言時間（秒）を算出した。

3）発言合計時間（秒）の変化

シェアリング場面におけるキャンプ 2 日目から 4 日目までの発言の変容をみるために、一元配置分散分析および多重比較（LSD）を用いて分析した。「ふりかえり発言チェックリスト」によって得られた発言内容をカテゴリー別に分類し、それらの発言の変化を表 20 と図 14、15 に示した。数値はキャンプ 2 日目から 4 日目までに行われたシェアリングの平均発言時間（秒）を 60 分間換算で算出したものである。

発言合計時間においてはキャンプ 2 日目（ $M=206.85$ $SD=84.68$ ）からキャンプ 3 日目（ $M=288.55$ $SD=107.96$ ）にかけて、発言時間が増加し、0.1%水準で有意差が認められた。キャンプ 4 日目（ $M=294.95$ $SD=134.67$ ）にもその発言時間が維持されていた。

表 2 0 シェアリングの発言時間（秒）の変化

N=50		キャンプ2日目 M (SD)	キャンプ3日目 M (SD)	キャンプ4日目 M (SD)	F値	多重比較(LSD)		
						2日目-3日目 平均の差	2日目-4日目 平均の差	3日目-4日目 平均の差
発言合計		206.85 (84.68)	288.55 (107.96)	294.95 (134.67)	15.05***	-81.70***	-88.11***	-6.40
肯定的評価因子		72.28 (65.42)	148.54 (89.74)	108.90 (110.26)	10.10***	-76.26***	-36.62*	39.64*
肯定的評価	自己	15.45 (14.20)	13.78 (12.27)	15.74 (18.96)	0.24	1.68	-0.29	-1.97
	他者	56.82 (64.46)	134.76 (87.65)	93.16 (105.10)	10.71***	-77.94***	-36.33*	41.61*
否定的評価因子		29.96 (16.22)	32.12 (19.33)	9.93 (10.28)	41.33***	-2.16	20.03***	22.19***
否定的評価	自己	20.32 (11.81)	18.91 (15.28)	6.86 (7.62)	22.74***	1.41	13.45***	12.05***
	他者	9.65 (9.33)	11.81 (15.25)	3.07 (6.06)	10.09***	-2.16	6.57***	8.74***
改善・提案因子		57.51 (41.87)	39.82 (38.97)	9.77 (18.62)	27.26***	17.69**	47.74***	30.05***
改善・提案	目標・方向性	40.54 (26.16)	18.37 (22.66)	4.18 (6.53)	48.38***	22.17***	36.36***	14.19***
	提案・助言	16.97 (28.02)	21.45 (33.55)	5.59 (17.89)	5.06**	-4.48	11.38*	15.86**
肯定的感情因子		6.56 (8.98)	9.47 (10.67)	13.72 (18.35)	3.98*	-2.90	-7.16**	-4.25
肯定的感情	肯定感情	3.71 (5.98)	5.44 (6.77)	9.65 (17.92)	3.58*	-1.73	-5.94*	-4.21
	感謝の気持ち	2.85 (6.02)	4.03 (6.49)	4.07 (5.36)	0.64	-1.18	-1.22	-0.04
自分自身因子		13.73 (26.59)	34.54 (74.18)	80.01 (89.94)	10.89***	-20.81+	-66.28***	-45.47*
自分自身	性格	5.44 (10.61)	4.51 (11.55)	13.53 (19.60)	5.63**	0.93	-8.09*	-9.02*
	過去経験	0.65 (2.84)	7.19 (24.61)	30.54 (50.87)	10.78***	-6.55+	-29.89***	-23.34**
	その他	7.64 (20.96)	22.83 (49.74)	35.95 (56.41)	4.65*	-15.19+	-28.30**	-13.11
日常転化因子		1.07 (2.91)	1.16 (3.26)	25.35 (27.25)	37.86***	-0.09	-24.28***	-24.19***
日常転化	今後の日常	0.33 (2.36)	0.34 (1.41)	10.42 (17.02)	16.98***	-0.01	-10.09***	-10.08***
	将来展望	0.74 (1.84)	0.82 (3.03)	14.93 (21.30)	21.18***	-0.08	-14.19***	-14.11***
その他因子		13.67 (13.21)	16.85 (21.04)	16.64 (22.65)	0.521	-3.18	-2.98	0.21
その他	発問	2.60 (6.91)	1.52 (3.68)	2.48 (4.82)	0.96	1.09	0.12	-0.97
	進行	0.90 (3.88)	1.60 (5.23)	3.03 (8.92)	1.93	-0.70	-2.14	-1.43
	同意・賛同	8.84 (7.72)	12.37 (17.63)	9.31 (13.62)	1.00	-3.53	-0.47	3.05
	励まし	1.33 (3.56)	1.37 (4.89)	1.82 (3.70)	0.23	-0.04	-0.48	-0.44

+P<.10 *P<.05 **P<.01 ***P<.001

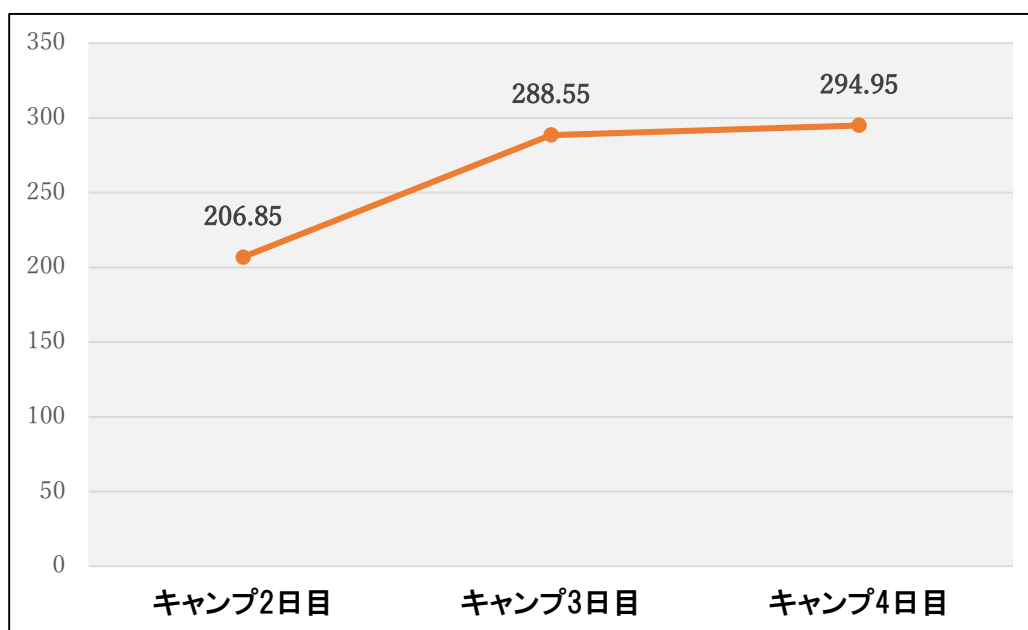


図 1 4 発言合計時間（秒）の変化

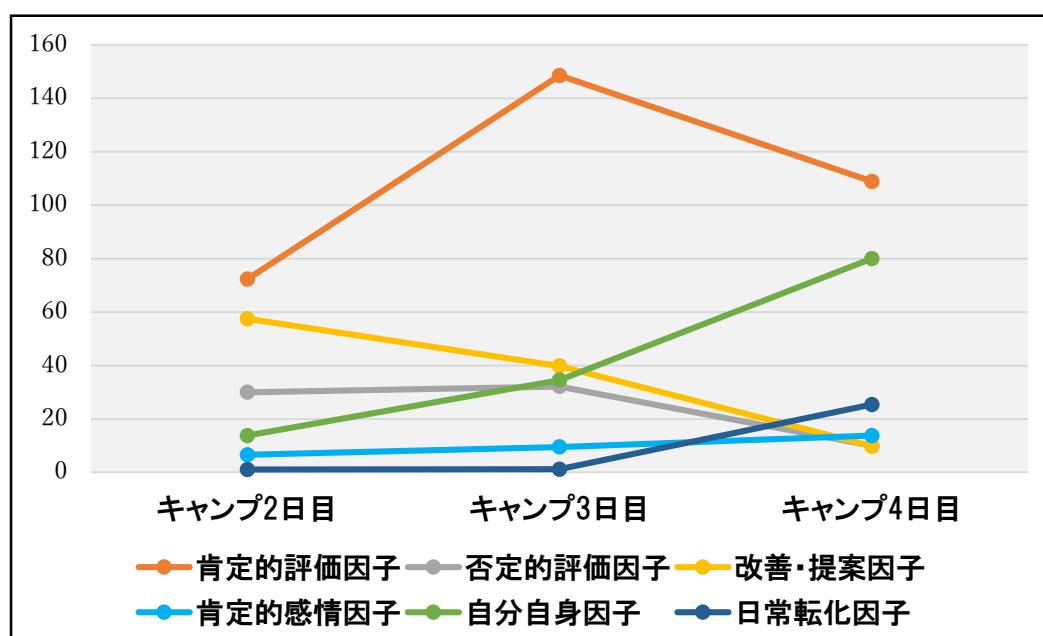


図 1 5 各因子の発言時間（秒）の変化

次に発言内容について、カテゴリー別に分析していく。発言のカテゴリーは7個の各カテゴリーの下にその下位カテゴリーを下記に示した。

1. 「肯定的評価」因子

- ・ 肯定的自己評価
- ・ 肯定的他者評価

2. 「否定的評価」因子

- ・ 否定的自己評価
- ・ 否定的他者評価

3. 「改善・提案」因子

- ・ 目標・方向性
- ・ 提案・助言

4. 「肯定的感情」因子

- ・ 肯定的感情
- ・ 感謝の気持ち

5. 「自分自身」因子（性格・過去経験、その他）

- ・ 性格
- ・ 過去経験
- ・ その他（性格や過去経験には含まれない自分自身に関する発言）

6. 「日常転化」因子（今後の日常・将来展望）

- ・ 今後の日常
- ・ 将来展望

7. 「その他」因子（発問・進行・同意賛同・励まし）

- ・ 発問
- ・ 進行
- ・ 同意賛同
- ・ 励まし

1. 肯定的評価因子

「肯定的評価」因子とは、自分自身や他者（グループ全体を含む）に対する肯定的な評価を示す。キャンプ 2 日目からキャンプ 3 日目にかけてこの発言が増加し、キャンプ 4 日目においてもその増加が維持されている。

さらに細かく分類した下位カテゴリー別の変化を表 2 1 と図 1 6 に示した。自分に対する肯定的な「自己評価」では大きな変化はみられなかった。自分以外の他者（グループ全体を含む）に対して肯定的に評価する「他者評価」ではキャンプ 2 日目からキャンプ 3 日目（ $M=134.76$ $SD=87.65$ ）にこの発言が増加し、0.1%水準で有意差が認められた。キャンプ 4 日目（ $M=93.16$ $SD=105.10$ ）にかけては、発言が減少したもののキャンプ 2 日目の発言時間を上回っており、発言の増加が維持されていた。

この結果から、肯定的評価の発言はキャンプ 2 日目から 3 日目にかけてこの発言が増加し、キャンプ 4 日目までその増加が維持されており、特にグループやグループの他者に対する肯定的他者評価（相手の良いところを認める）の発言が 3 日目以降に増加することが明らかとなった。キャンプの様々な体験や活動をグループ内の他者と取り組むことによって相手の良いところを知り、気持ちを伝え合えるようになり発言時間が増加したことが示唆された。

表 2 1 「肯定的自己評価」因子と「肯定的他者評価」因子の変化

N=50		キャンプ2日目 M (SD)	キャンプ3日目 M (SD)	キャンプ4日目 M (SD)	F値	多重比較(LSD)		
						2日目-3日目 平均の差	2日目-4日目 平均の差	3日目-4日目 平均の差
肯定的評価因子		72.28 (65.42)	148.54 (89.74)	108.90 (110.26)	10.10***	-76.26***	-36.62*	39.64*
肯定的評価	自己	15.45 (14.20)	13.78 (12.27)	15.74 (18.96)	0.24	1.68	-0.29	-1.97
	他者	56.82 (64.46)	134.76 (87.65)	93.16 (105.10)	10.71***	-77.94***	-36.33*	41.61*

*P<.05 **P<.01 ***P<.001

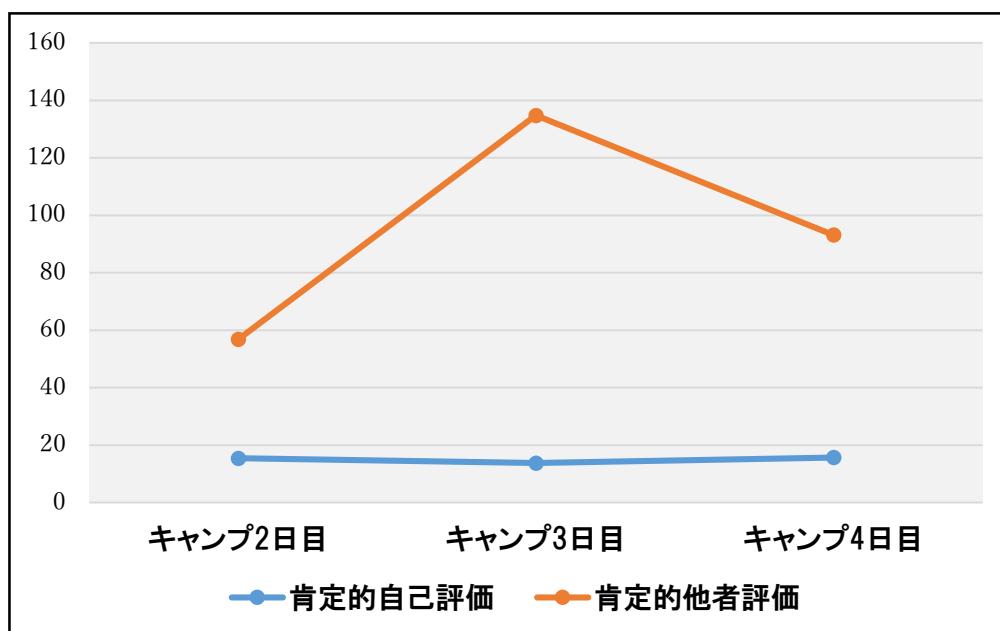


図 1 6 「肯定的自己評価」因子と「肯定的他者評価」因子の変化

2. 否定的評価因子

「否定的評価」因子とは、自分自身や他者（グループ全体を含む）に対する否定的な評価を示す。いわば、個人やグループの反省点を発言することである。キャンプ 2 日目、3 日目はこの発言が多く、キャンプ 4 日目には有意に減少している。

さらに細かく分類した下位カテゴリー別の変化を表 2.2 と図 1.7 に示した。自分に対する否定的な「自己評価」ではキャンプ 2 日目とキャンプ 3 日目に発言が多く、キャンプ 4 日目 ($M=6.86$ $SD=7.62$) にかけてこの発言が有意に減少し、0.1%水準で有意差が認められた。

自分以外の他者（グループ全体を含む）に対して否定的に評価する「他者評価」でも、キャンプ 2 日目と 3 日目に発言が多く、キャンプ 4 日目 ($M=3.07$ $SD=6.06$) にかけてこの発言が有意に減少し、0.1%水準で有意差が認められた。

この結果から、否定的評価の発言はキャンプ 2 日目と 3 日目ではこの発言が多く、キャンプ 4 日目にかけてこの発言が減少し、特に自分に対する否定的自己評価（自分の反省する点）の発言がキャンプ 4 日目に減少し、グループやグループの他者に対する否定的他者評価（グループの反省や課題等）の発言においてもキャンプ 4 日目に減少することが明らかとなった。キャンプ 2 日目と 3 日目で、出来なかった部分の自己反省やグループでの反省点を多く述べ合っていたのは、次の日に向けての反省点の確認という側面があり、主な活動を終えたキャンプ 4 日目の最後のシェアリングでは反省点が少ない発言になったことが発言時間から示された。

表 2 2 「否定的自己評価」因子と「否定的他者評価」因子の変化

N=50		キャンプ2日目 M (SD)	キャンプ3日目 M (SD)	キャンプ4日目 M (SD)	F値	多重比較(LSD)		
						2日目-3日目 平均の差	2日目-4日目 平均の差	3日目-4日目 平均の差
否定的評価因子		29.96 (16.22)	32.12 (19.33)	9.93 (10.28)	41.33***	-2.16	20.03***	22.19***
否定的評価	自己	20.32 (11.81)	18.91 (15.28)	6.86 (7.62)	22.74***	1.41	13.45***	12.05***
	他者	9.65 (9.33)	11.81 (15.25)	3.07 (6.06)	10.09***	-2.16	6.57***	8.74***

*** $P < .001$

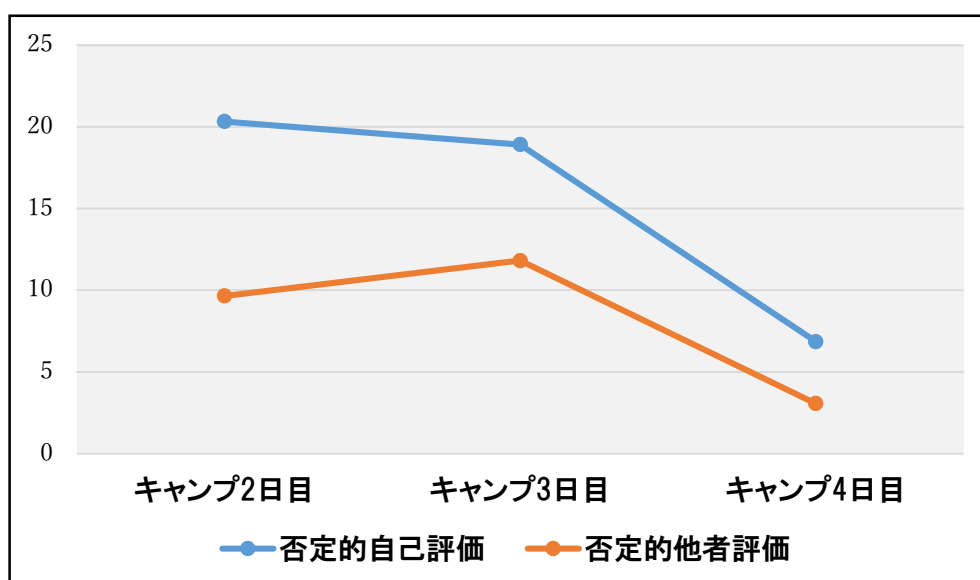


図 1 7 「否定的自己評価」因子と「否定的他者評価」因子の変化

3. 改善・提案因子

「改善・提案」因子とは、個人や班の目標や方向性、自分の意見や考えを提案したり助言したりする発言を示す。キャンプ 2 日目 ($M=57.51$ $SD=41.87$) にはこの発言が多く、キャンプ 3 日目、キャンプ 4 日目にかけて有意に減少している。

さらに細かく分類した下位カテゴリー別の変化を表 2 3 と図 1 8 に示した。個人や班の目標や方向性についての発言内容を示す「目標・方向性」では、キャンプ 2 日目からキャンプ 3 日目にかけてこの発言が減少し、0.1%水準で有意差が認められた。キャンプ 4 日目 ($M=4.18$ $SD=6.53$) にかけても発言が有意に減少する傾向がみられた。

自分の意見を提案したり他者（グループ全体を含む）に助言したりする発言内容を示す「提案・助言」では、キャンプ 2 日目とキャンプ 3 日目には平均約 20 秒この発言がされており、キャンプ 4 日目に発言が有意に減少する（平均約 6 秒）傾向がみられた。

この結果から、改善・提案の発言はキャンプ 2 日目からキャンプ 4 日目にかけてこの発言が減少し、特に個人やグループの目標・方向性の発言がキャンプ 3 日目以降に減少し、提案・助言の発言においてもキャンプ 4 日目に減少することが明らかとなった。キャンプ 2 日目と 3 日目では出来なかった部分の自己反省やグループでの反省点を多く話し合われていたことから次の日に向けた課題改善の発言内容も多くなされていたことが示唆される。主な活動を終えたキャンプ 4 日目の最後のシェアリングでは課題改善に向けた発言が少なくなったことが発言時間から示された。

表 2 3 「目標・方向性」因子と「提案・助言」因子の変化

N=50		キャンプ2日目 M (SD)	キャンプ3日目 M (SD)	キャンプ4日目 M (SD)	F値	多重比較(LSD)		
						2日目-3日目 平均の差	2日目-4日目 平均の差	3日目-4日目 平均の差
改善・提案因子		57.51 (41.87)	39.82 (38.97)	9.77 (18.62)	27.26***	17.69**	47.74***	30.05***
改善・提案	目標・方向性	40.54 (26.16)	18.37 (22.66)	4.18 (6.53)	48.38***	22.17***	36.36***	14.19***
	提案・助言	16.97 (28.02)	21.45 (33.55)	5.59 (17.89)	5.06**	-4.48	11.38*	15.86**

*P<.05 **P<.01 ***P<.001

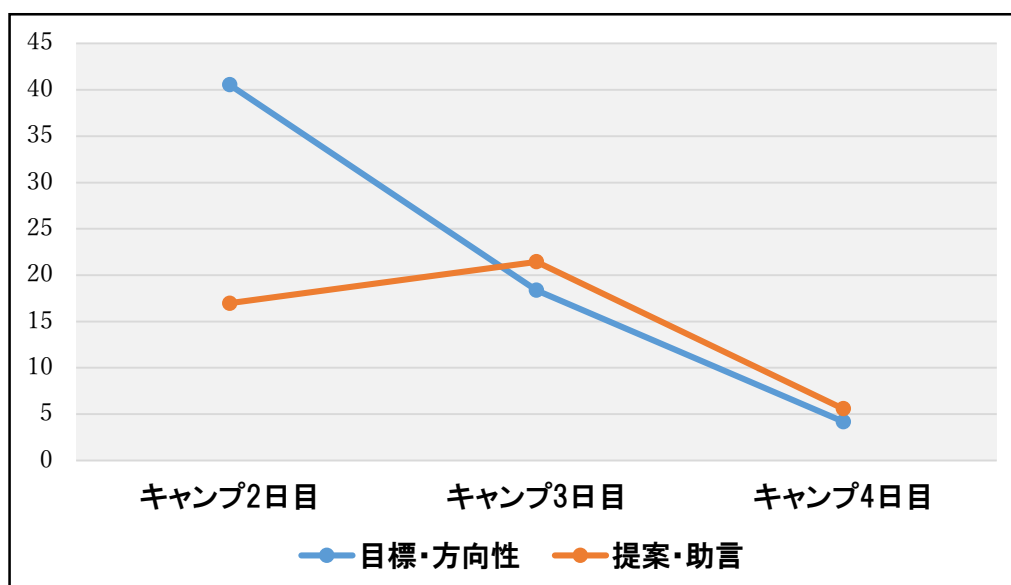


図 1 8 「目標・方向性」因子と「提案・助言」因子の変化

4. 肯定的感情因子

「肯定的感情」因子とは、受容・共感などの嬉しい気持ちや他者に対する感謝の気持ちを示す。キャンプ 2 日目からキャンプ 3 日目にかけてこの発言が多く、キャンプ 4 日目には有意に増加している。

さらに細かく分類した下位カテゴリー別の変化を表 2 4 と図 1 9 に示した。受容・共感などの喜びの感情を表す発言内容を示す「肯定感情」では、キャンプ 2 日目とキャンプ 3 日目では平均約 5 秒この発言がされており、キャンプ 4 日目 ($M=9.65$ $SD=17.92$) にかけて発言が増加する傾向がみられた。

「助かったよ」・「ありがとう」などの感謝を表す発言内容を示す「感謝の気持ち」では、この発言の変化に有意な差はみられなかった。

この結果から、肯定的感情の発言はキャンプ 2 日目と 3 日目からキャンプ 4 日目にかけてこの発言が増加し、特に喜びや嬉しい気持ちなどを表す肯定的感情の発言がキャンプ 4 日目に増加することが明らかとなった。

表 2 4 「肯定感情」因子と「感謝の気持ち」因子の変化

N=50		キャンプ2日目 M (SD)	キャンプ3日目 M (SD)	キャンプ4日目 M (SD)	F値	多重比較(LSD)		
						2日目-3日目 平均の差	2日目-4日目 平均の差	3日目-4日目 平均の差
肯定的感情因子		6.56 (8.98)	9.47 (10.67)	13.72 (18.35)	3.98*	-2.90	-7.16**	-4.25
肯定的感情	肯定感情	3.71 (5.98)	5.44 (6.77)	9.65 (17.92)	3.58*	-1.73	-5.94*	-4.21
	感謝の気持ち	2.85 (6.02)	4.03 (6.49)	4.07 (5.36)	0.64	-1.18	-1.22	-0.04

* $P < .05$ ** $P < .01$

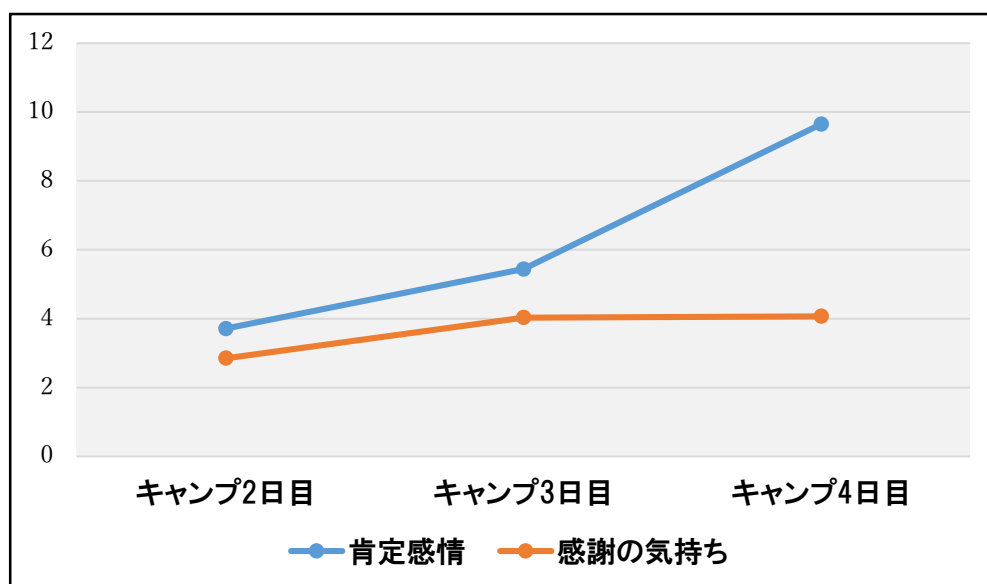


図 1 9 「肯定感情」因子と「感謝の気持ち」因子の変化

5. 自分自身因子

「自分自身」因子とは、自分の性格や過去の経験、それ以外に自分自身についてさらけ出す発言を示す。キャンプ 2 日目からキャンプ 3 日目にかけてこの発言が増加する傾向がみられ、キャンプ 4 日目 ($M=80.01$ $SD=89.94$) にかけても有意に増加し、最も発言が多かった。

さらに細かく分類した下位カテゴリー別の変化を表 2 5 と図 2 0 に示した。自分の性格をさらけ出す発言内容を示す「性格」では、キャンプ 2 日目とキャンプ 3 日目に約 5 秒この発言がされており、キャンプ 4 日目 ($M=13.53$ $SD=19.60$) にかけて発言が増加し、5% 水準で有意差が認められた。

現在より過去の様々な体験や経験についての発言内容を示す「過去経験」においては、キャンプ 2 日目 ($M=0.65$ $SD=2.84$) ではほとんどなかったこの発言がキャンプ 3 日目に増加し、有意傾向がみられた。さらにキャンプ 4 日目 ($M=30.54$ $SD=50.87$) にかけて発言が有意に増加する傾向がみられた。

「性格」「過去経験」には含まれない自分自身のことについての発言内容を示す「その他」ではキャンプ 2 日目からキャンプ 3 日目にかけてこの発言が増加し、さらにキャンプ 4 日目にかけて発言が増加する傾向がみられた。

この結果から、自分自身のことについての発言はキャンプ 2 日目から 3 日目にかけて発言時間が増加し、キャンプ 4 日目にかけてさらに増加することが明らかとなった。特にキャンプ 2 日目に発言がほとんどなかった自分の過去の経験についてはキャンプ 3 日目以降にこの発言が増加し、同様に性格やその他の自分自身に関する発言においても増加してい

ることが明らかとなった。主な活動を終えたキャンプ4日目の最後のシェアリングでは、キャンプとは直接的に関係のない自分自身の悩みや過去の経験などの発言が多くなったことが発言時間から示された。

表 2 5 「性格」因子と「過去経験」因子と「その他」因子の変化

N=50		キャンプ2日目 M (SD)	キャンプ3日目 M (SD)	キャンプ4日目 M (SD)	F値	多重比較(LSD)		
						2日目-3日目 平均の差	2日目-4日目 平均の差	3日目-4日目 平均の差
自分自身因子		13.73 (26.59)	34.54 (74.18)	80.01 (89.94)	10.89***	-20.81+	-66.28***	-45.47*
自分自身	性格	5.44 (10.61)	4.51 (11.55)	13.53 (19.60)	5.63**	0.93	-8.09*	-9.02*
	過去経験	0.65 (2.84)	7.19 (24.61)	30.54 (50.87)	10.78***	-6.55+	-29.89***	-23.34**
	その他	7.64 (20.96)	22.83 (49.74)	35.95 (56.41)	4.65*	-15.19+	-28.30**	-13.11

* $P < .05$ ** $P < .01$ *** $P < .001$

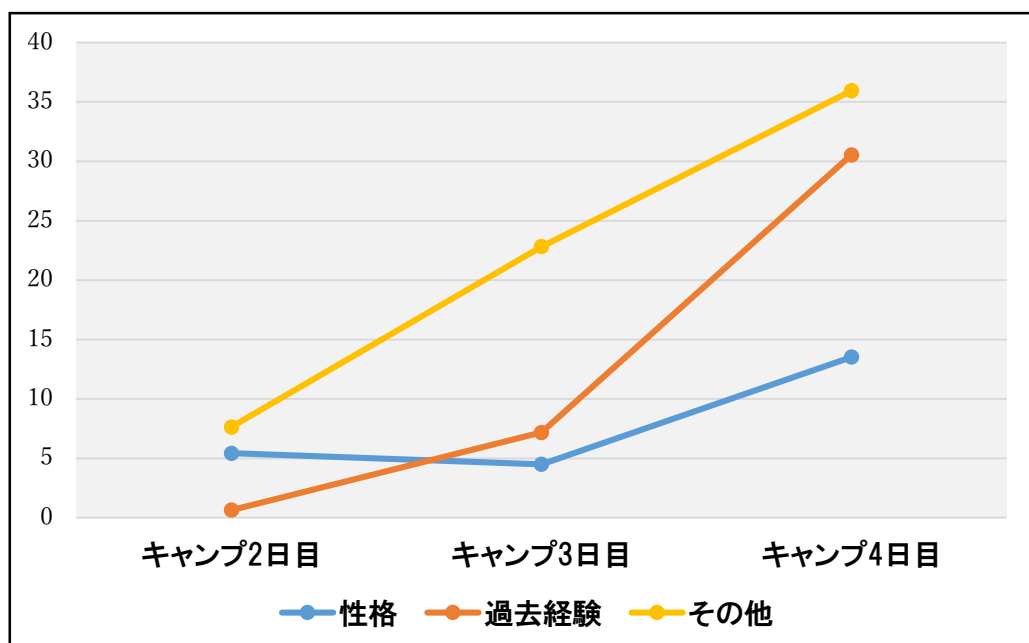


図 2 0 「性格」因子と「過去経験」因子と「その他」因子の変化

6. 日常転化因子

「日常転化」因子とは、キャンプを終えての今後の日常や将来の夢、未来のことについての発言を示す。キャンプ2日目、3日目にはほとんどなかったこの発言がキャンプ4日目 ($M=25.35$ $SD=27.25$) にかけて有意に増加している。

さらに細かく分類した下位カテゴリー別の変化を表26と図21に示した。キャンプ直後の日常生活での目標についての発言内容を示す「今後の日常」と将来の夢や未来のことについての発言内容を示す「将来展望」では、キャンプ2日目とキャンプ3日目ではほとんどなかった2つの発言がキャンプ4日目 ($M=25.35$ $SD=27.25$) に有意に増加し、0.1%水準で有意差が認められた。特に将来展望に関する発言が多かった。

この結果から、日常転化の発言はキャンプ2日目・3日目ではほとんどなかったが、キャンプ4日目にこの発言が増加しており、今後の日常や将来展望についての発言も同様にキャンプ4日目に増加していることが明らかとなった。主な活動を終えたキャンプ4日目の最後のシェアリングでは、キャンプ直後の日常や自分の将来についての発言が多くなったことが発言時間から示された。

表 2 6 「今後の日常」因子と「将来展望」因子の変化

N=50		キャンプ2日目 M (SD)	キャンプ3日目 M (SD)	キャンプ4日目 M (SD)	F値	多重比較(LSD)		
						2日目-3日目 平均の差	2日目-4日目 平均の差	3日目-4日目 平均の差
日常転化因子		1.07 (2.91)	1.16 (3.26)	25.35 (27.25)	37.86***	-0.09	-24.28***	-24.19***
日常転化	今後の日常	0.33 (2.36)	0.34 (1.41)	10.42 (17.02)	16.98***	-0.01	-10.09***	-10.08***
	将来展望	0.74 (1.84)	0.82 (3.03)	14.93 (21.30)	21.18***	-0.08	-14.19***	-14.11***

***P<.001

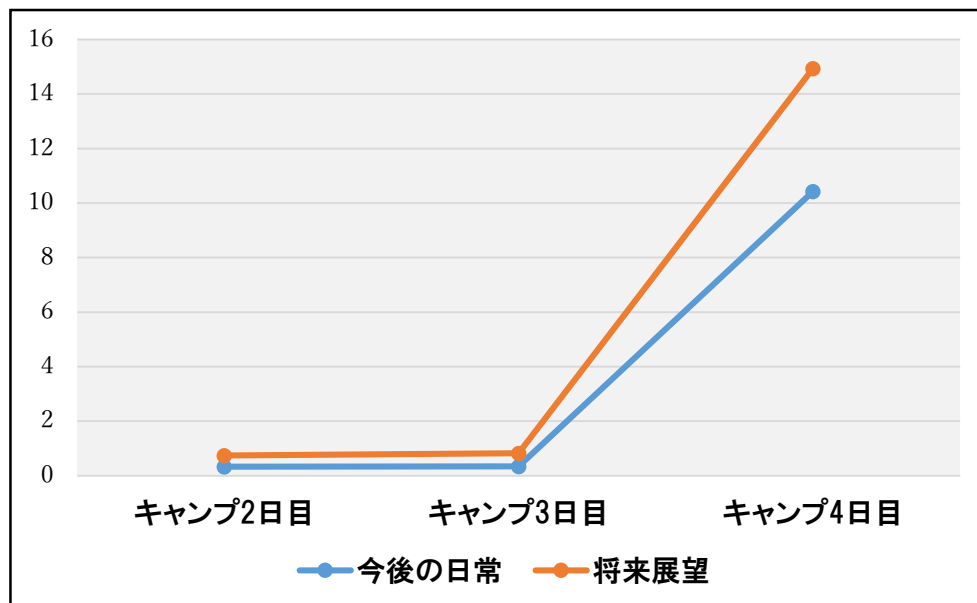


図 2 1 「今後の日常」因子と「将来展望」因子の変化

7. その他因子

「その他」因子とは、発問・進行・同意賛同・励ましを示す。

その他因子においては、下位カテゴリー別にも大きな変化は見られなかった（表27と図22）。

この結果から、発問・進行・同意賛同・励ましの発言において変化がないことが明らかとなった。ただし、グループや他者の意見などに同意賛同する下位カテゴリーにおいて、その他の下位カテゴリーよりも発言が多いことが明らかとなった。

表27 「発問」・「進行」・「同意賛同」・「励まし」因子の変化

N=50		キャンプ2日目 M (SD)	キャンプ3日目 M (SD)	キャンプ4日目 M (SD)	F値	多重比較(LSD)		
						2日目-3日目 平均の差	2日目-4日目 平均の差	3日目-4日目 平均の差
その他因子		13.67 (13.21)	16.85 (21.04)	16.64 (22.65)	0.521	-3.18	-2.98	0.21
その他	発問	2.60 (6.91)	1.52 (3.68)	2.48 (4.82)	0.96	1.09	0.12	-0.97
	進行	0.90 (3.88)	1.60 (5.23)	3.03 (8.92)	1.93	-0.70	-2.14	-1.43
	同意・賛同	8.84 (7.72)	12.37 (17.63)	9.31 (13.62)	1.00	-3.53	-0.47	3.05
	励まし	1.33 (3.56)	1.37 (4.89)	1.82 (3.70)	0.23	-0.04	-0.48	-0.44

N. S.

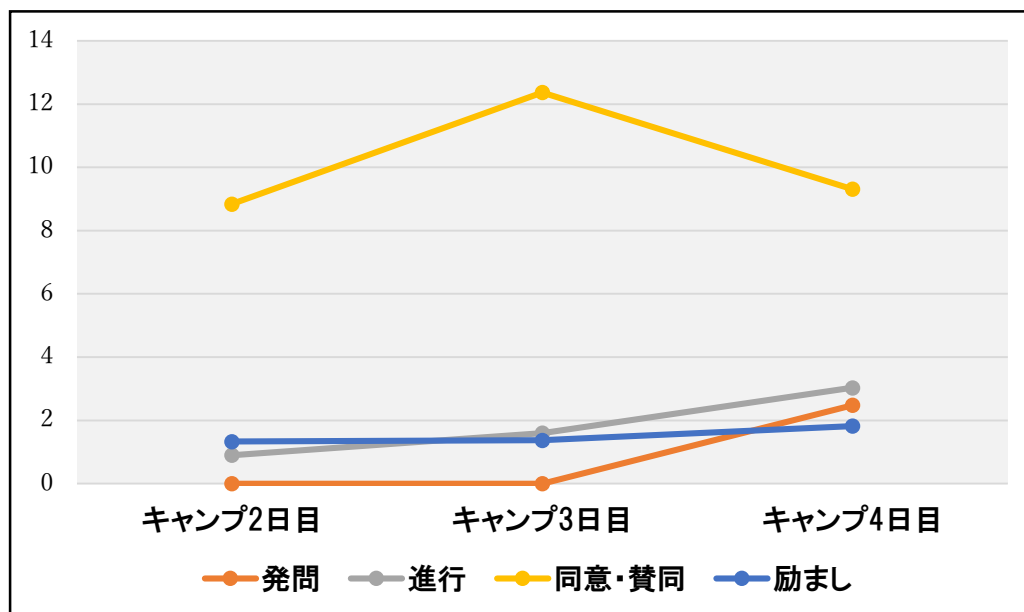


図 2 2 「発問」・「進行」・「同意賛同」・「励まし」因子の変化

これらの結果から、発言合計時間はキャンプの日数を追うにつれて増加することが明らかとなった。キャンプ 2 日目・3 日目には個人や班を振り返り、上手くいったことや上手くいかなかったことについて発言する「肯定的評価」・「否定的評価」因子や、さらにそれらの反省を改善するための「改善・提案」因子等の発言時間が多い傾向がみられた。キャンプ 4 日目には自分自身をさらけ出す発言を示す「自分自身」因子や「日常転化」因子である自分の今後の日常に向けての発言や将来に関する内容の発言へと変化していく傾向にあることが明らかとなった。

さらに細かく分類した下位カテゴリ別の変容をみた結果から、肯定的評価因子では肯定的に他者（グループ全体を含む）を評価する「肯定的

他者評価」因子において、発言が増加することが明らかとなった。自分に対する肯定的な発言よりも他者やグループに対する肯定的な発言が増加するということは、様々な体験や活動をグループ内の他者と取り組むことによって相手の良いところを知り、気持ちを伝え合えるようになったためだと考えられる。

否定的評価因子では否定的に自己を評価する「否定的自己評価」因子において、発言時間が減少する傾向にあることが明らかとなった。キャンプ2日目と3日目で、活動する中で出来なかった部分の自己反省やグループでの反省点が多く話し合われていたことには、次の日に向けての反省点の確認という側面があり、主な活動を終えたキャンプ4日目の最後のシェアリングでは反省点が少なくなったことが要因であると、発言時間から示唆された。

改善・提案因子では、「目標・方向性」因子、「提案・助言」因子ともにキャンプ3日目以降にかけてこの発言が減少する傾向にあることが明らかとなった。キャンプ2日目と3日目には個人やグループ全体の課題改善に向けた発言が多く話し合われ、キャンプ4日目には反省点に関する発言が少なくなったことが課題改善に向けた発言の減少の要因であると示唆される。

自分自身因子では、「性格」因子、「過去経験」因子、「その他」因子とともにキャンプ2日目から4日目にかけて発言時間が増加し、日常転化因子においても「今後の日常」因子、「将来展望」因子ともに発言時間が増加する傾向にあることが明らかとなった。キャンプ直後半には、反省や課題改善に向けた発言内容から、自分自身や今後についての発言内容に変化していることが示唆される。

3) 発言割合(%)の変化

シェアリング場面におけるキャンプ2日目から4日目までの発言の変容をみるために、一元配置分散分析を用いて分析した。「ふりかえり発言チェックリスト」によって得られた発言をカテゴリー別に分類した発言内容の変化を表21と図23に示した。数値はキャンプ2日目からキャンプ4日目までに行われたシェアリングの発言合計時間を100%に換算した各カテゴリーの発言割合である。

「肯定的評価」因子では、キャンプ3日目に全体の半分以上の発言割合を占めており、キャンプ2日目よりもキャンプ3日目・4日目に肯定的な発言内容の割合が高くなり、1%水準で有意差が認められた。特に他者（グループ全体を含む）を肯定的に評価する「肯定的他者評価」因子において発言割合が高い傾向がみられた。

「否定的評価」因子では、キャンプ2日目（ $M=17.32$ $SD=12.26$ ）から4日目（ $M=5.02$ $SD=7.30$ ）にかけて発言割合が減少し、0.1%水準で有意差が認められた。その中でも、自分の反省点を述べる「否定的自己評価」因子とグループ全体や他者の反省点を述べる「否定的他者評価」因子の発言割合が減少していく傾向がみられた。

「改善・提案」因子では、キャンプ2日目で約30%あった発言割合がキャンプ4日目にかけて減少傾向にあり、キャンプ4日目には全体で最も少ない4.05%を示している。特に反省点の課題改善に向けた発言である「目標・方向性」因子がキャンプ2日目に約22%を占めている。

「肯定的感情」因子では、キャンプ2日目・3日目に大きな変化はない

ものの、キャンプ 4 日目に全体の 6.02% まで向上している。

「自分自身」因子では、キャンプ 2 日目から 4 日目にかけて発言割合が有意に向上 ($P<.001$) し、キャンプ 4 日目には全体の約 30% を占めている。

「日常転化」因子では、キャンプ 2 日目・3 日目には発言がほとんど見られなかったが、キャンプ 4 日目に全体の 8.67% まで向上し、0.1% 水準で有意差が認められた。

これらの結果から、シェアリングを重ねるにつれて、発言内容の割合が変化することが明らかとなった。「肯定的評価」因子は各日程の全体の割合からみると発言割合が高いカテゴリーであることが明らかとなり、中でもキャンプ 3 日目の発言割合が最も高く、主に他者（グループ全体を含む）を肯定的に評価する発言内容が多くなされていることが明らかとなった。自己や他者（グループ全体を含む）に対する否定的な発言の「否定的評価」因子ではキャンプ 2 日目と 3 日目の発言割合で 10% 以上を占めており、4 日目には発言割合が減少していることが明らかとなった。キャンプ 2 日目と 3 日目は自分やグループ全体、他者への反省点が多く話し合われ、課題改善に向けた「改善・提案」因子の発言割合も 10% 以上を占めていることから次の日の活動に向けた話し合いが多くされていることが示唆される。キャンプ 4 日目の最後のシェアリングでは反省点や課題改善に関わる発言が減少し、キャンプとは直接的に関係のない「自分自身」因子や「日常転化」因子などの自分自身をさらけ出す発言が多くなったことが発言割合の変化した要因であると考えられる。

表 2 1 発言内容の割合変化 (%)

N=50		キャンプ2日目 M (SD)	キャンプ3日目 M (SD)	キャンプ4日目 M (SD)	F値
発言合計		100%	100%	100%	
肯定的評価因子		34.98 (22.54)	53.28 (25.97)	41.55 (28.63)	5.58**
肯定的評価	自己	8.96 (7.51)	5.22 (5.41)	7.03 (8.31)	3.11*
	他者	26.03 (23.51)	48.06 (26.49)	34.52 (28.08)	7.99**
否定的評価因子		17.32 (12.26)	12.22 (8.13)	5.02 (7.30)	23.36***
否定的評価	自己	12.00 (9.26)	7.25 (5.39)	3.18 (4.55)	21.14***
	他者	5.32 (5.17)	4.27 (5.85)	1.84 (4.62)	7.09**
改善・提案因子		29.99 (18.67)	13.88 (10.91)	4.05 (7.31)	51.19***
改善・提案	目標・方向性	22.37 (16.70)	7.19 (8.67)	1.96 (4.08)	53.62***
	提案・助言	7.62 (10.26)	6.69 (8.37)	2.08 (6.36)	6.28**
肯定的感情因子		3.54 (5.22)	3.45 (4.25)	6.02 (9.37)	2.61+
肯定的感情	肯定感情	2.22 (4.26)	2.05 (3.03)	4.64 (9.42)	2.92+
	感謝の気持ち	1.33 (2.91)	1.41 (2.32)	1.38 (1.69)	0.01
自分自身因子		6.38 (10.17)	11.66 (22.56)	29.23 (25.28)	16.09***
自分自身	性格	2.62 (4.62)	1.75 (4.48)	6.09 (9.44)	5.86**
	過去経験	0.30 (1.28)	2.01 (6.20)	10.40 (15.88)	13.93***
	その他	3.46 (7.89)	7.90 (16.48)	12.74 (15.61)	5.32**
日常転化因子		0.72 (1.88)	0.33 (0.90)	8.67 (8.74)	40.49***
日常転化	今後の日常	0.17 (1.23)	0.10 (0.43)	3.25 (4.96)	18.01***
	将来展望	0.55 (1.49)	0.23 (0.82)	5.42 (7.79)	20.26***
その他因子		7.07 (6.39)	5.18 (5.78)	5.47 (5.65)	1.58
その他	発問	1.05 (2.89)	0.47 (1.15)	0.94 (2.05)	1.31
	進行	0.38 (1.55)	0.43 (1.45)	0.75 (1.94)	0.92
	同意・賛同	4.92 (4.55)	3.93 (5.05)	3.23 (4.05)	1.64
	励まし	0.71 (1.75)	0.34 (1.21)	0.55 (1.16)	0.84

+P<.10 *P<.05 **P<.01 ***P<.001

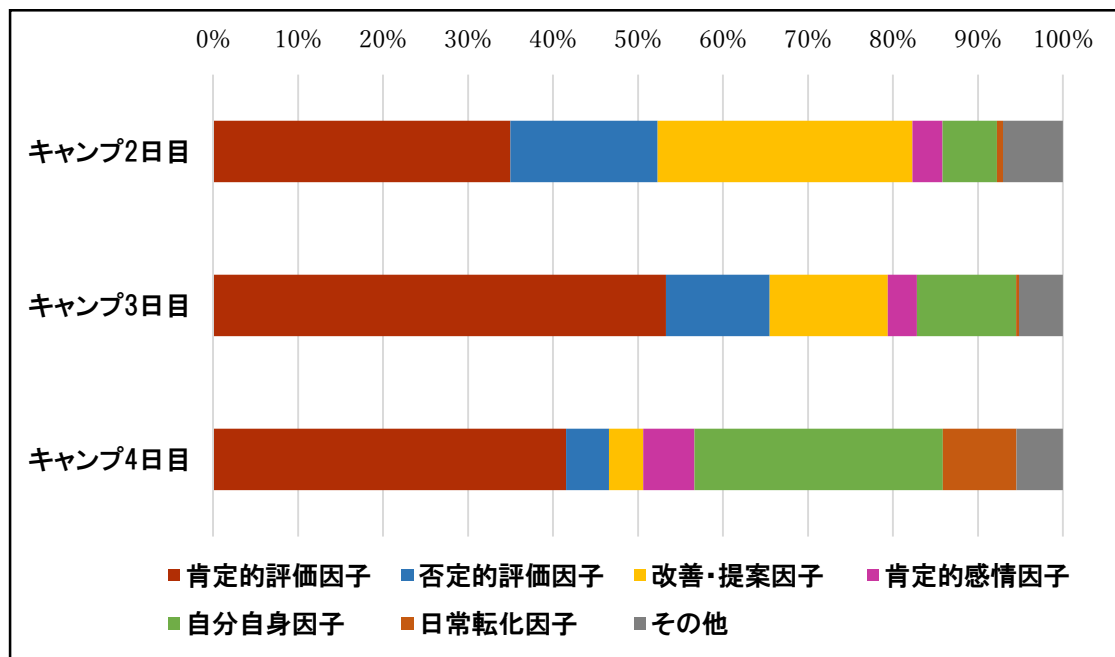


図 2 3 発言内容の割合変化（％）

5. 自己開示性とシェアリングの関連

シェアリングにおける発言は人に自分の考えや自分自身のことを話すという行為が含まれているため、自己開示との関係性が強いと考え、ここでは自己開示性と発言の関連を検討していくこととした。

自己開示性とシェアリングの発言の関連性をみるために、キャンプ参加前からキャンプ参加直後にかけての自己開示性得点の向上が大きい群を「向上大群 (N=16)」、向上が小さい群を「向上小群 (N=17)」、得点が減少した群を「減少群 (N=17)」とし、シェアリングの発言内容の変化に違いがあるのかを検討した。

自己開示性の得点がキャンプ直後に大きく向上した「向上大群」の変化を中心に発言時間の変化と感想レポートの記載状況も合わせて記述していく。

1) 発言時間（秒）の変化

自己開示変化群別に発言合計時間の変化をみるために、分散分析および多重比較（LSD）を用いて分析した。変化量の得点の範囲および人数は、課題 3 の表 1 5 に示す通りである。発言合計時間（秒）の変化を表 2 3 と図 2 4 に示した。

キャンプ直後に自己開示性の得点が大きく向上した「向上大群」は、キャンプ 2 日目（M=163.32 SD=68.48）の発言時間が他群より顕著に少なかった。それがキャンプ 3 日目（M=307.08 SD=104.55）には 3 つの群で最も長い発言時間に変化していた。他群においてもキャンプ 2 日目

から 3 日目にかけて発言時間は増加しているが、「向上大群」の増加率が他群を大きく上回っていた。

このキャンプ 3 日目にかけて発言時間が顕著に増加したことが、自己開示性得点のキャンプ直後の向上につながったと考えられる。

表 2 3 自己開示変化群別の発言合計時間（秒）の変化

	一元配置分散分析				多重比較(LSD)			二元配置分散分析		
	キャンプ2日目 M(SD)	キャンプ3日目 M(SD)	キャンプ4日目 M(SD)	F値	2日目-3日目 平均の差	2日目-4日目 平均の差	3日目-4日目 平均の差	時期	自己開示 変化群	群×時期 交互作用
向上大群 N=16	163.32 (68.48)	307.08 (104.55)	307.20 (134.10)	20.12***	-143.76***	-143.88***	-0.11	17.33***	0.40	3.98**
向上小群 N=17	225.95 (79.92)	272.28 (106.72)	335.46 (120.29)	5.42**	-46.33+	-109.51**	-63.18			
減少群 N=17	228.70 (91.58)	287.38 (115.91)	242.92 (139.44)	2.50+	-58.68*	-14.21	44.46			

+P<.10 *P<.05 **P<.01 ***P<.001

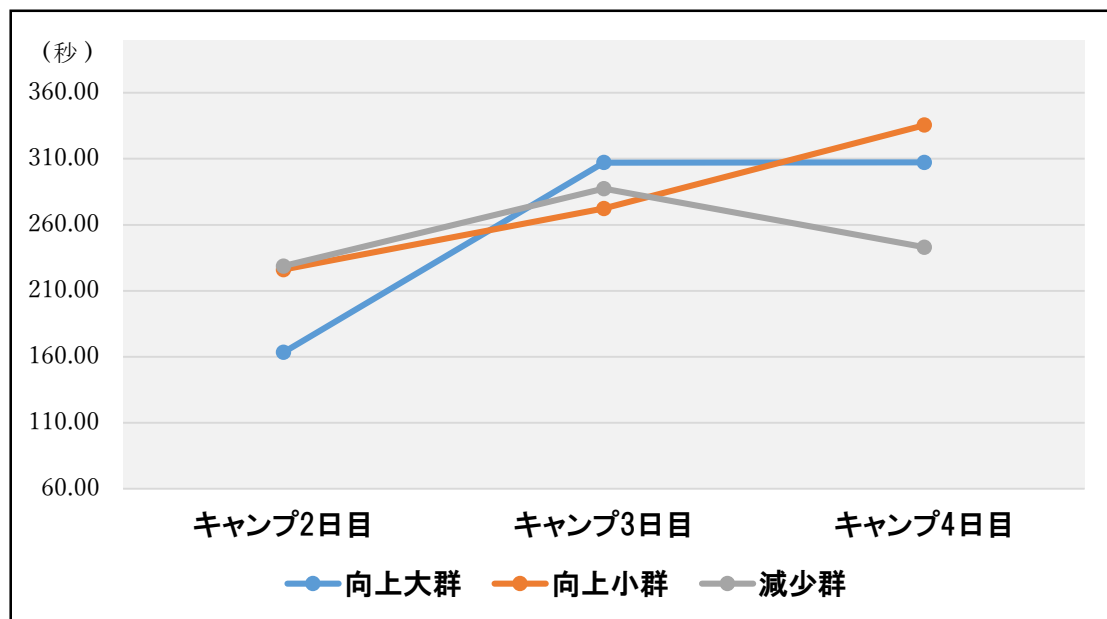


図 2 4 自己開示変化群別の発言合計時間（秒）の変化

次に、自己開示性の得点がキャンプ直後に大きく向上した「向上大群」における各カテゴリーの発言の変化について分散分析および多重比較（最小有意義）を用いて分析した。その結果を表 2 4 に示した。また発言割合（％）の変化を表 2 5 に示した（巻末資料 B に向上小群と減少群の結果を表 2 6 ～ 2 7、自己開示変化群別の各カテゴリーの発言変化の結果を表 2 8 ～ 3 4 に示す）。

表 2 4 自己開示変化群別 「向上大群」の各カテゴリーの
発言時間（秒）の変化

		一元配置分散分析				多重比較(LSD)		
向上大群 N=16		キャンプ2日目 M(SD)	キャンプ3日目 M(SD)	キャンプ4日目 M(SD)	F値	2日目-3日目 平均の差	2日目-4日目 平均の差	3日目-4日目 平均の差
発言合計時間		163.32 (68.48)	307.08 (104.55)	307.20 (134.10)	20.12***	-143.76***	-143.88***	-0.11
肯定的評価		54.92 (54.72)	147.35 (92.60)	127.00 (120.36)	5.81**	-92.43**	-72.09*	20.34
肯定的 評価	自己評価	11.28 (7.40)	14.75 (15.05)	12.57 (15.42)	0.25	-3.47	-1.29	2.18
	他者評価	43.64 (53.64)	132.60 (89.47)	114.44 (117.00)	5.47**	-88.96**	-70.80*	18.16
否定的評価		26.10 (16.53)	34.74 (21.83)	8.31 (7.87)	16.34***	-8.65+	17.79**	26.44***
否定的 評価	自己評価	18.67 (13.27)	14.66 (14.56)	6.89 (7.58)	4.10*	4.01	11.77**	7.77+
	他者評価	7.43 (6.99)	16.08 (17.40)	1.41 (3.19)	7.14**	-8.65+	6.02**	14.66**
改善・提案		49.43 (36.89)	36.21 (31.93)	9.20 (16.89)	8.09**	13.23	40.23**	27.01*
肯定的感情		8.13 (10.83)	9.57 (10.91)	15.67 (29.38)	0.75	-1.44	-7.54	-6.10
自分自身		5.79 (10.72)	53.31 (108.95)	64.96 (75.95)	2.30	-47.53	-59.17**	-11.64
日常転化		2.03 (4.44)	2.79 (5.17)	23.63 (29.19)	7.60**	-0.76	-21.60*	-20.84*
その他		7.79 (6.94)	18.91 (22.00)	21.60 (35.10)	1.91	-11.12+	-13.81	-2.69

+P<. 10 *P<. 05 **P<. 01 ***P<. 001

表 2 5 自己開示変化群別 「向上大群」の各カテゴリーの
発言割合（％）の変化

		一元配置分散分析				多重比較(LSD)		
向上大群 N=16		キャンプ2日目 M(SD)	キャンプ3日目 M(SD)	キャンプ4日目 M(SD)	F値	2日目-3日目 平均の差	2日目-4日目 平均の差	3日目-4日目 平均の差
発言合計時間		100%	100%	100%				
肯定的評価		31.92 (24.10)	51.21 (26.28)	45.05 (29.28)	1.81	-19.29+	-13.13	6.16
肯定的 評価	自己評価	8.92 (7.74)	4.97 (5.94)	5.55 (6.83)	1.35	3.95	3.37	-0.58
	他者評価	23.01 (24.41)	46.25 (27.03)	39.51 (28.76)	2.77+	-23.24*	-16.50+	6.74
否定的評価		21.10 (18.59)	12.49 (9.52)	3.60 (3.37)	9.02**	8.61+	17.50**	8.90**
否定的 評価	自己評価	15.64 (14.69)	5.42 (5.36)	2.95 (3.33)	9.01**	10.22*	12.69**	2.47
	他者評価	5.46 (5.43)	5.27 (5.31)	0.65 (1.67)	5.38*	0.20	4.82**	4.62**
改善・提案		30.92 (23.09)	11.99 (9.77)	4.43 (8.43)	13.05***	18.93**	26.49**	7.56*
肯定的感情		5.04 (6.98)	3.79 (5.15)	8.40 (15.17)	0.93	1.25	-3.36	-4.61
自分自身		3.88 (7.05)	14.28 (27.41)	25.00 (24.15)	3.50*	-10.40	-21.13**	-10.72
日常転化		1.56 (2.94)	0.80 (1.40)	7.25 (7.81)	8.10**	0.76	-5.69*	-6.45**
その他		5.58 (6.09)	5.43 (5.96)	6.28 (7.43)	0.09	0.15	-0.70	-0.84

+P<.10 *P<.05 **P<.01 ***P<.001

2) キャンプ 2 日目－3 日目

キャンプ 2 日目とキャンプ 3 日目のシェアリングでは、個人またグループとして 1 日の活動をふりかえり、良かったところや反省点についてシェアリングが行われた。また、そのシェアリングから出た意見をもとに次の日の活動に向けた改善や目標についての話し合いを深めた。

キャンプ 2 日目から 3 日目に特に発言時間が増えた発言を中心に「向上大群 (N=16)」についてのみ記述していく。

①「肯定的他者評価」因子

「肯定的評価」因子に含まれる他者（グループ全体を含む）を肯定的に評価する発言を示す「肯定的他者評価」因子ではキャンプ 2 日目からキャンプ 3 日目にかけて顕著にこの発言が多くなっている。発言割合をみても、キャンプ 2 日目（23%）から 3 日目（46%）にかけて割合が顕著に増加していることが明らかとなった。

この結果から、キャンプ 2 日目と 3 日目の様々な活動を通してグループ内の仲間と協力して問題解決するプログラムに取り組む中で、仲間の良いところを知り、気持ちを伝え合えるようになり発言時間が増加したことが考えられる。

②「自分自身」因子

性格や過去の経験、それ以外の自分自身についての発言内容を示す「自分自身」因子ではキャンプ 2 日目から 3 日目にかけて顕著にこの発言が多くなっている。発言割合をみると、キャンプ 2 日目（4%）から 3 日

目（14％）にかけて割合が顕著に増加していることが明らかとなった。
この結果から、キャンプ2日目には少なかった自分自身を表す発言がキャンプ3日目に増加していることは、初対面のグループの仲間と様々な活動や話し合いを重ね、徐々に自分自身の気持ちを打ち明けられる関係性やシェアリングの雰囲気を作られたことが要因であると考えられる。

③「否定的自己評価」因子と「否定的他者評価」因子

「否定的評価」因子に含まれる自分の反省点を発言する「否定的自己評価」因子ではキャンプ2日目から3日目にかけてこの発言の大きな変化は見られなかった。しかし、発言割合をみると、キャンプ2日目（16％）から3日目（5％）まで割合が顕著に減少していることが明らかとなった。

他者（グループ全体を含む）の反省点を発言する「否定的他者評価」因子ではキャンプ2日目から3日目にかけてこの発言が多くなっている。この結果から、キャンプ2日目にはグループ全体や他者よりも自分の反省点を発言する傾向にあったが、キャンプ3日目には他者評価が自己評価を上回っていることが明らかとなった。キャンプ3日目にグループ全体や他者の反省点を発言する時間が増加していることは、グループとしての関係性が徐々に深まり、良くない点・改善すべき点についてのシェアリングが行われたことが一要因であると考えられる。

3）キャンプ4日目（主な活動が終わったシェアリング）

キャンプ4日目のシェアリングでは、キャンプ全体を通しての感想を中心に行った。またキャンプとは直接的に関係のない自分自身の悩みや

過去の経験、将来のことなどを吐露するシェアリングが行われた。

キャンプ4日目に変化した発言を中心に記述していく。

①「自分自身」因子

前述のキャンプ2日目からキャンプ3日目で「自分自身」因子の発言が顕著に増加した結果に引き続き、キャンプ4日目にかけてもさらにこの発言が多くなっている。発言割合をみると、顕著に増加した3日目（14%）から4日目（25%）にかけて割合が増加していることが明らかとなった。

この結果から、主な活動を終えたキャンプ4日目の最後のシェアリングでは、キャンプとは直接的に関係のない自分自身の悩みや過去の経験などの発言が多くなったことが発言時間増加の要因であると考えられる。

②「日常転化」因子

キャンプ直後の日常や将来に向けた内容の発言をする「日常転化」因子では、キャンプ2日目と3日目でほとんど発言がみられなかった。ただし、キャンプ4日目において、この発言が顕著に多くなっている。発言割合をみると、約2%未満であった「日常転化」因子が4日目には全体の約7%まで向上していることが明らかとなった。

この結果から、主な活動を終えたキャンプ4日目のシェアリングではキャンプ全体のシェアリングが中心に行われたため、今後の日常や将来に関する内容を表す「日常転化」因子の発言時間が増加したと考えられる。

③「肯定的感情」因子

受容、共感などの嬉しい気持ちや他者に対する感謝の気持ちを表す「肯定的感情」因子では、キャンプ4日目に発言が多くなっている。発言割合をみると、キャンプ4日目には全体の約8%を占める発言であることが明らかとなった。

この結果から、肯定的感情因子の発言時間がキャンプ4日目に増加していることは、グループ内の仲間同士の関係が深まりを増し、自分自身の肯定的な感情を他者に共有できるようになったことやキャンプ全体のシェアリングでグループの他者に感謝の気持ちを伝えたことなどが発言時間増加の要因であると考えられる。

4)「向上大群」の自己開示性の質問項目別の変化

次に、自己開示性の得点がキャンプ直後、大きく向上した者（N=16）に限定して、自己開示性の質問項目別（15項目）の得点がキャンプ実

習参加前とキャンプ実習参加直後でどのように変化したかを見るために、t 検定を用いて分析した。その結果を表 2 6 に示した（表の☆印の項目は逆転項目である）。

キャンプ直後に提出した感想レポートの記載状況も合わせて記述していく。

自己開示性の得点がキャンプ直後に大きく向上した者の質問項目別の変化では、キャンプ参加前に「たとえ親しい友だちでも、自分の心の内を知られたくない」（逆転項目）や「友だちから自分のことを聞かれても必要以上のことは話さない」（逆転項目）など自分自身のことを話す自己開示が消極的だったが、キャンプ直後にその項目の得点が向上することが明らかとなった。

また、「あまり他人のことを知ろうとしない」（逆転項目）や「友だちから悩みを打ち明けられるのは、好きでない」（逆転項目）など他者の話を聞いたり、相談に乗ったりする項目についても得点の向上がみられた。

さらに「悩みごとがあると、すぐに人に相談するほうだ」の得点が向上し、「友だちとはあたりさわりのない ‘‘軽い’’ 会話が楽しい」（逆転項目）がより ‘‘深い’’ 会話が楽しいに変化していることがわかった。これらの変化をまとめると、自分の内面を他者に話すこと、自分の悩みを相談することへの抵抗感が減少し、他人のことをもっと知りたい、他人の悩みも聞いてあげたいというコミュニケーションの話す側と聞く側の両面における積極的な変化であると言える。

これらの変化はシェアリングにおける発言内容の 4 日目にかけての変化

と連動していると考えられる。

次に自己開示性が大きく向上した 16 名のキャンプ直後の感想レポートに記述してある文章の内容について検討を行った。この感想レポートは「キャンプ実習で感じたことを自由に書いて下さい」との指示のもとで作成され、書き方や量（文字数）には制限のないものであった。

16 名の感想レポートを見ると、16 名中 15 名に各グループで夜に実施された「シェアリング活動」のことが記述されていた。

下記の内容は実際の感想レポートを一部抜粋したものである。

○普段あまり感じる事のない雰囲気の中で話し合うことは、最初は恥ずかしくて変な感じだと思っていた。しかし、2 日目・3 日目と日が経つごとにその空気は変わっていき、話したいことが話せる時間になった。

○普通に生活していて知り合ったり、仲良くなったりすることはあり得ない人たちだったけど、何も知らない状態から始まったからこそ、その人についてより知ることが出来た。

○真剣な雰囲気だったので、1 日の自分をしっかりと振り返れたし、普段は言えない本音や自分の意見を言える良い機会だった。

○相手の良いところを見つける、自分の良いところを見つけてもらえたことが自分を認めてもらえた気がして、言いたいことが言えるようになった。

○活動する度にそれぞれの良いところを知ることができ、各自の悩んで

ることを相談し合い、そのことについて真剣に話し合えるほどの仲になった。

○自分の悩みについて、出会って数日のメンバーに話すのは少し恥ずかしかったけど、このメンバーなら真剣に話を聞いてくれるという信頼と安心感があったからこそ正直に話すことができた。

これらのことから、シェアリングが行われた夜の‘‘シェアリング活動’’を通して、元々自己開示の消極的だった者がグループ内のメンバーと様々な活動に向けた話し合いを繰り返したことで、他者の意見を受け入れたり自分から発信したりすることが顕著な発言の増加につながり、キャンプ直後の自己開示性得点の向上につながったと考えられる。

表 2 6 自己開示性の質問項目別（15 項目）の変化

(キャンプ参加前とキャンプ参加直後の変化)

向上大群 N=16	キャンプ前 M(SD)	直後 M(SD)	t値
☆1. 友だちと会話するとき、あまり自分のことを話さない	3.56 (1.09)	3.69 (0.95)	-0.13
☆2. 友だちから悩みを打ち明けられるのは、好きでない	3.88 (0.96)	4.31 (0.60)	-0.44*
3. 人に尋ねられなくても、自分のことを積極的に話すほうだ	3.44 (1.03)	3.44 (0.96)	0.00
☆4. 友だちと将来のことを話すときなどに、どちらかという聞き役にまわることが多い	2.50 (1.03)	2.81 (1.17)	-0.31
☆5. 自分の考えや気持ちを友だちに話すとき、結局、表面的なことがらを話して終わることが多い	3.00 (0.97)	3.38 (0.72)	-0.38+
☆6. 友だちから自分のことを聞かれても必要以上のことは話さない	3.00 (1.03)	3.63 (0.89)	-0.63*
☆7. 友だちに悩みを打ち明けて、非常に恥ずかしい思いをしたことがある	3.38 (1.31)	3.56 (1.21)	-0.19
☆8. 悩みがあっても、人に相談せず一人で解決しようとする	3.31 (0.79)	3.50 (0.89)	-0.19
☆9. 友だちとは、あたりさわりのない「軽い」会話をするのが楽しい	2.50 (1.10)	3.06 (1.12)	-0.56*
10. 自分のことを友だちにいろいろ話すことが好きだ	3.36 (0.72)	4.00 (0.89)	-0.38+
☆11. たとえ親しい友だちでも、自分の心の内を知られたくない	3.06 (0.77)	3.81 (0.83)	-0.75**
☆12. あまり他の人のことを知ろうとは思わない	3.81 (0.75)	4.44 (0.63)	-0.63**
☆13. 自分のことについて聞かれると、さりげなく話題をそらす	3.56 (0.96)	4.06 (0.68)	-0.50*
14. 悩みごとがあると、すぐに人に相談するほうだ	2.94 (0.85)	3.50 (0.89)	-0.56*
15. 友だちに悩みを打ち明けられることがよくある	3.13 (0.96)	3.56 (1.09)	-0.44*

※項目得点は5点満点

+P<.10 *P<.05 **P<.01

※☆印は逆転項目

6. 考察

本研究の目的は、大学キャンプ実習における参加者の信頼感および自己開示性に及ぼす影響を明らかにし、シェアリングにおける発言との関連について検討することである。

本節では設定した 5 つの課題に沿って、得られた結果をそれぞれ述べたうえで、過去の研究を踏まえ総合的に考察していく。

課題 1 キャンプ実習参加者の信頼感の変容に及ぼす影響を検討する。

本研究の結果から、大学キャンプ実習を経験することで参加者全体の信頼感が向上することが明らかとなった。特に信頼感を構成する 3 つの因子のうち、「他人への信頼」因子においてキャンプ直後にかけて顕著な影響があることが明らかとなった。

キャンプ実習参加前の信頼感合計得点群別における変化の違いでは、中位群、下位群において信頼感が向上し、その向上はキャンプ 1 ヶ月後まで維持されることが明らかとなった。特にキャンプ前に信頼感の得点が最も低かった下位群の得点の向上率が高く、「他人への信頼」だけでなく「自分への信頼」も向上し、キャンプ 1 ヶ月後までその向上が維持されていることが明らかとなった。

課題 2 キャンプ実習参加者の自己開示性の変容に及ぼす影響を検討

する。

本研究の結果から、大学キャンプ実習に参加することによる、参加者全体の自己開示性に大きな変化は見られなかった。

キャンプ実習参加前の自己開示性合計得点群別における変化の違いでは、下位群においてキャンプ直後に有意な得点向上が認められ、1 ヶ月後にもその向上は維持され、キャンプ参加前に自己開示性が低かった者が、キャンプ参加を通して自己開示性が向上することが明らかとなった。

課題 3 キャンプ実習参加者の信頼感と自己開示性の関連を検討する。

本研究の結果から、自己開示性得点がキャンプ直後に大きく向上した「向上大群」において信頼感得点が向上し、1 ヶ月後までその向上が維持されることが明らかとなった。向上大群においては「自分への信頼」、「不信（逆転）」因子で得点の向上が見られ、1 ヶ月後までその向上が維持されることが明らかとなり、自己開示性の向上と信頼感の向上に関連性が強いことが示唆された。

課題 4 キャンプ実習参加者のシェアリングにおける発言内容の変容

を検討する。

本研究の結果から、シェアリングの発言合計時間はキャンプの日数を追うにつれて増加することが明らかとなった。発言内容の全体的傾向として、キャンプ前半には個人や班を振り返り、上手くいったことや上手くいかなかったことについて発言する「肯定的評価」・「否定的評価」因子や、さらにそれらの反省を改善するための「改善・提案」因子等の発言時間が多いことが明らかとなった。キャンプ後半には自分自身をさらけ出す発言を示す「自分自身」因子や「日常転化」因子である自分の今後に向けての発言や将来に関する発言内容に変化していく傾向にあることが明らかとなった。

課題 5 大学キャンプ実習参加者の自己開示性とシェアリングの関連を検討する。

本研究の結果から、シェアリングにおける発言合計時間の変化はキャンプ後に自己開示性得点が大きく向上した「向上大群」において、発言時間が他群より顕著に少なかったキャンプ2日目からキャンプ3日目にかけて発言時間が顕著に増加し、増加率が他群を大きく上回り、キャンプ4日目にもその増加が維持されることが明らかとなった。

カテゴリー別の発言の変化では「向上大群」において、キャンプ3日目に「肯定的評価」因子の発言時間が増加する傾向がみられ、特に他者を肯定的に評価する発言が増加している。キャンプ4日目には「自分自身」、

「日常転化」、「肯定的感情」因子の発言時間が増加することが明らかとなった。

「向上大群」における自己開示性の質問項目別の変化では、キャンプ参加直後に自分の内面を他者に話すこと、悩みを相談すること等の項目と他人のことをもっと知りたい、悩みを聞いてあげたいという項目の得点が向上していることが明らかとなった。

また、自己開示性が向上した 16 名のキャンプ直後の感想レポートの内容を分析した結果、夜の「シェアリング」活動に関する肯定的な記述が多いことが認められ、自己開示性が向上した者の多くは、「シェアリング」の影響を強く受けていたことが示唆された。

ここからは本研究の課題 1－5 に沿った結果と先行研究を交えて総合

的に考察していくこととする。

本研究では信頼感および自己開示性に及ぼす影響を明らかにし、シェアリングにおける発言との関連について検討してきた。

本研究の結果からは、キャンプ実習参加の経験を通して参加者の信頼感が向上し、特に「他人への信頼」において顕著な向上がみられた。自己開示性においては、参加者全体で変化はなかったものの、元々その低い者において自己開示性が向上した。また、自己開示性の向上と信頼感の向上には強い関連性があることが示された。さらにシェアリングにおける発言との関連では、キャンプ直後に自己開示性得点の向上が大きかった者においてキャンプ前半から後半にかけて発言時間が顕著に増加しており、キャンプ直後の自己開示性の質問項目別の変化から、話す側と聞く側の両面における積極的な変化が示された。これらのことから、特に自己開示性がキャンプ直後に大きく向上した者において「シェアリング」活動の有効性がより顕著であることが明らかとなった。

本研究で取り上げた信頼感を含む「対人関係性」に関して前田（2013）²⁸⁾ は「キャンプ経験によりありのままの自分を生きようとし、相手を受け入れられる傾向となり、1ヶ月後も維持されることが明らかとなった」と述べている。本研究におけるキャンプ実習においても、「他人への信頼」が顕著に向上したことから、様々な活動や話し合い、キャンプ期間中に毎日実施された「シェアリング」活動を通して仲間を信頼し、受け入れられるようになったことが信頼の向上につながったと考えられる。

また永井ら（2007）²⁹⁾ は「教育的な目的を持って実施される組織キャンプは自然の中での共同生活や課題に取り組み達成していくプログラムを

行うことで通常の学校生活での交流よりも深い相互作用が生まれ信頼感に影響を与える」と述べており、青年期の信頼感の向上につながることを示唆している。さらに、正親ら(2016)¹⁵⁾は「組織キャンプ中に仲間と寝食をともにし、グループで協力をしなければ解決できない課題や、身の安全を仲間に委ねなければできない活動を通し、他人との関わりを実体験として学んだことが信頼感の変容につながった」と述べている。本研究の大学キャンプ実習でもグループの仲間と寝食を共にし、様々な活動や話し合いを重ねるシェアリングを重視したプログラムを実施した。

本研究において信頼感が元々低かった下位群において、「自分への信頼」が向上したことから、キャンプ実習の活動における話し合いや協力し合う活動、シェアリング活動を通して、自分自身に対して自信を持ち、信頼できるようになったことで「自分への信頼」が向上したと考えられる。

また、杉浦(2014)³⁰⁾は冒険教育プログラム体験における大学生の自己開示は向上することを報告しており、それは「冒険教育プログラム中で互いにコミュニケーションをとり、課題を解決したことが要因である」と述べている。自然体験活動において様々な課題を達成するためには、グループの仲間とのコミュニケーションが必要な場面が多くあり、そうした場面でグループ内の仲間に自己開示することは必要であると考えられる。さらに栗栖(2011)³¹⁾はキャンプ実習におけるシェアリングにより「自己表現・対人的積極性」がキャンプ直後に有意に向上することを報告している。

本研究では、参加者全体の自己開示性の向上は見られなかったものの、元々自己開示性が低かった者において、キャンプ直後に自己開示性が向上し、その向上がキャンプ1ヶ月後にも維持されていた。つまり、元々

自己開示が苦手だった者がキャンプ実習に参加し、活動中の話し合いを通して課題を解決したり、シェアリング活動において自分の意見を言ったりする機会を得たことが自己開示の向上に影響したと考えられる。

また、自己開示性得点がキャンプ直後に大きく向上した者において信頼感が向上し、1ヶ月後までその向上が維持された。特に「自分への信頼」、「不信（逆転）」因子が向上し、キャンプ1ヶ月後まで向上が維持されることが明らかとなった。このことから、自己開示性の向上と信頼感の向上には強い関連性があることが示唆された。山田（2010）⁴⁾は「信頼感とは自己開示と関連して、自分のことを他者に伝えるためには欠かせない要素である」と述べており、また「自分への信頼でもいえるように、自分自身を受容できていると、自分の成功や喜びだけではなく、失敗も相手と分かち合えるのである。このように自己の受容から自分が感じたことなどを相手と分かち合うことが出来れば、自己を開示していくことができるようになるのである。また、人は個人的な情報を明かされることにより、相手から信頼され、尊重されていると感じ、相手に対してより信頼感を抱くようになるのである」と述べている。

このことから人は誰しも他人から信頼されていると感じられなければ自分から個人的な情報を話すことは難しいと言える。参加者がキャンプを通してグループの仲間と多くの同じ時間を共有し、喜びや悲しみなどの感情をシェアリングし、自分と他者に対してどのような影響があるのかを身をもって体験することは非常に貴重な体験であると言える。

次に本研究で行ったシェアリングにおける発言の変容について考察する。田中（2009）¹⁸⁾は、「ふりかえりとは活動からの気づきや学びを整理し、次への活動や日常生活へつなぐパイプ的な役割をするものであり、

活動を振り返ることで、その活動を単に‘‘体験した’’という経験で終わらせるのではなく、活動を共にした仲間と活動中の出来事について思い出し、意味づけをすることで‘‘体験からの学び’’を得る機会である」と述べている。

また栗栖(2011)³¹⁾は、大学キャンプ実習で参加者に対してふりかえり活動を行わせることは、自己肯定意識の「自己受容」、「自己実現的態度」、「充実感」、「自己表明・対人的積極性」の4因子が向上することを明らかにし、「ふりかえりを導入した大学キャンプ実習は、参加者の自己肯定意識をふりかえりを導入しなかった場合よりも向上させる」と述べている。

野外教育では、このようなふりかえりの中でお互いの気づきを分かち合う時間を大切にしており、同じ体験をした仲間と気づきや考えをシェアすることで気づきに広がりや深まりを持たせることが出来ると考えられている。

本研究では、シェアリング場面で参加者が実際に発言した発言時間と発言内容を検討し、キャンプの日数を追うにつれて発言合計時間が増加することが明らかとなった。全体的な傾向としては、キャンプ2日目・3日目には個人やグループを振り返り、上手くいったことや上手くいかなかったことについて発言する「肯定的評価」・「否定的評価」因子や、さらにそれらの反省を改善するための「改善・提案」因子等の発言時間が多い傾向がみられた。キャンプ4日目には自分自身をさらけ出す発言を示す「自分自身」因子や「日常転化」因子である自分の今後の日常に向けた発言や将来に関する内容の発言へと変化していく傾向にあることが明らかとなった。参加者は毎日様々な体験に取り組み、1日の終わりにシ

シェアリングを行う中で、キャンプ前半は自分たちの活動や行動を改めて見つめ直し、欠点に気づき、改善に向けた提案や目標を掲げていた。さらにキャンプ直後半になると話し合いは深まりを増し、自分自身の過去の経験や将来について自分がどのように物事に取り組んでいきたいか等の発言内容に広がりを見せた。グループ内の仲間とともに過ごす時間が長くなることで、自分自身のことについて、発言しやすい雰囲気が生まれ、「話してみようかな」と感じる人が出てきたのではないかと考える。村井(2017)³²⁾は「知らなかった者同士が自然の中でお互いを認め合いながら、グループとして成長を成し遂げられたことも大きな成果の一つである」と述べている。さらに杉浦(2014)³⁰⁾は、「大学生は状況に応じた自己開示をしながら互いにコミュニケーションを取り、課題を解決していったため自己開示を向上させ、それは日常における自己開示にも影響し、特に初対面の人に対する自己開示を向上させた」と述べている。

本研究の結果から、キャンプ参加前からキャンプ参加直後にかけての自己開示性得点の向上が大きかった者において、発言時間が他群より顕著に少なかったキャンプ2日目から、発言時間がキャンプ3日目にかけて顕著に増加した。さらに、増加率が他群を大きく上回り、キャンプ4日目にもその増加が維持されることが明らかとなった。特にキャンプ2日目で少なかった自分自身を表す発言がキャンプ3日目に顕著に増加しており、初対面のグループの仲間と様々な活動や話し合いを重ね、徐々に自分自身の気持ちを打ち明けられる関係性やシェアリングの雰囲気が作られたことが発言時間増加の一要因になったと考えられる。

荒木ら(2011)³¹⁾はキャンプ参加者は班員・スタッフ(ここでは班担当カウンセラー)もしくは班員といるときの方が一人でいるときよりもふ

りかえり体験が起きていることを明らかにしており、特に「変化への気づき」・「他者理解」・「関係性の理解」の3つの因子において班員・スタッフといるときにより高まることを報告している。さらに「1日の中で夕方から夜にかけての時間帯にふりかえり体験が起こりやすい」とも報告している。本研究における「シェアリング」活動も1日の活動の最後となる夜に各グループで静かな雰囲気で行われることを大切にして実施した。

キャンプ参加直後に自己開示性得点の向上が大きかった者の自己開示質問項目別の変化の結果から、自分の内面を他者に話すこと、自分の悩みを相談することへの抵抗感が減少し、他人のことをもっと知りたい、他人の悩みも聞いてあげたいというコミュニケーションの話す側と聞く側の両面における積極的な変化が示された。

実際に自己開示性の向上が大きかった者の感想レポートには、夜の「シェアリング」活動について多く記述されており、活動を通して、元々自己開示の消極的だった者がグループ内のメンバーと様々な活動に向けた話し合いを繰り返したことで、他者の意見を受け入れたり自分から発信したりすることが顕著な発言の増加につながり、キャンプ直後の自己開示性得点の向上につながったと考えられる。

第 四 章

結 論

本研究の目的は、大学キャンプ実習が参加者の信頼感および自己開示性に及ぼす影響を明らかにし、シェアリングにおける発言内容との関連について検討することであった。

そのため、本研究では、キャンプ実習参加者に信頼感および自己開示性に関する調査をキャンプ参加前後と 1 ヶ月後に実施するとともに、夜の「シェアリング」活動における参加者の発言について分析し、検討していくこととした。

本研究では、以上のことを明らかにするために、下記の課題を設定した。

課題 1：キャンプ実習参加者の信頼感の変容に及ぼす影響を検討する。

課題 2：キャンプ実習参加者の自己開示性の変容に及ぼす影響を検討する。

課題 3：キャンプ実習参加者の信頼感と自己開示性の関連を検討する。

課題 4：キャンプ実習参加者のシェアリングにおける発言内容の変容を検討する。

課題 5：大学キャンプ実習参加者の自己開示性とシェアリングの関連を検討する。

2019年9月2日から9月6日までの4泊5日で実施された京都教育大学正課授業である大学キャンプ実習に参加した大学生53名（男子19名 女子34名）のうち、すべての検査が回収・分析された計50名（男子18名 女子32名）[回収率：94.3%]を分析対象とした。

キャンプでは6～8名の小グループでの活動を中心に、テント泊、全食自炊のキャンプ活動を基本としている。各グループには、1名の班担当指導者（カウンセラー）を配置した。

キャンプ実習の主な活動は、自然体験ゲーム、森の芸術展、遊び作り・遊びの体験、森のお祭りであり、いずれもグループ内での話し合いや共同作業を重視した活動であった。

また、キャンプ期間中（2日目・3日目・4日目）の就寝前に各グループで行う「シェアリング」活動を取り入れた。ここでは、メンバーがどのような体験をしたか、その体験からどのようなことを考えたかなど、お互いの気づきを分かち合う時間を大切にしている。この「わかちあい」は、「シェアリング」とも呼ばれており、個人の気づきや学びを同じ体験をしたグループのメンバーと報告し合い共有することで、気づきに広がりや深まりをもたせることができると考えられている。

「シェアリング」活動とは、個人またグループとして1日の活動（4日目に関しては、キャンプ全体の感想）をふりかえることだが、そのふりかえりを通して自分自身の内面に目を向けていくような構造で行われた。本研究では、静かにふりかえることの出来る雰囲気大切にしたいと考え、ろうそくランタンを用いてグループごとにテントにて実施した。

「シェアリング」活動の一定の質を確保するために、『「シェアリング（ふりかえり）」の実施方法について』をカウンセラーに事前に配布し、

- ・ 静かな雰囲気の中でシェアリングを進めること
- ・ カウンセラーがリードし、全員が話をするように進めること
- ・ 普段言えない悩みや不安などを他者に吐露する機会になるような雰囲気を作ること

といった実施に伴う注意事項について、事前に説明を行い、カウンセラーが共通認識し、各グループで行われた。

本研究では、キャンプ実習参加者の信頼感および自己開示性の変容を明らかにするために、天貝（1995）³⁾ が作成した「信頼感尺度」と末永（1987）²⁴⁾ が作成した「自己開示行動自己評価尺度」をキャンプ前、直後、1ヶ月後の計3回実施した。

また、キャンプ2日目からキャンプ4日目までに行われた夜の「シェアリング」活動で発言される参加者の発言の変容を検討するために音声を収録し、得られたデータを基に作成した「ふりかえり発言チェックリスト」を用いて、カテゴリーに分類した。

それらの得られたデータは、相関係数や分散分析、多重比較、t検定などを用いて、統計処理を行った。

本研究では以下のことが明らかとなった。

1. 大学キャンプ実習を経験することで、参加者全体の信頼感が向上し、この向上は1ヶ月後まで維持されることが明らかとなった。特に「他人への信頼」因子においてキャンプ直後にかけて顕著な影響があることが明らかとなった。また元々信頼感の低かった者においてその向上は顕著であった。
2. 大学キャンプ実習を経験することによる参加者全体の自己開示性の変化は認められなかった。ただし、キャンプ参加前に自己開示性が低かった者はキャンプ直後に自己開示性が向上し、1ヶ月後までその向上が維持されることが明らかとなった。
3. 自己開示性がキャンプ直後にかけて大きく向上した者においては信頼感が向上し、1ヶ月後までその向上が維持されることが明らかとなった。特に「自分への信頼」、「不信（逆転）」因子においてキャンプ直後にそれらが向上し、1ヶ月後までその向上が維持されることが明らかとなり、自己開示性の向上と信頼感の向上に強い関連性が示された。
4. ふりかえりの発言合計時間はキャンプの日数を追うにつれて増加することが明らかとなった。発言内容の全体的傾向として、キャンプ前半には個人や班を振り返り、上手くいったことや上手くいかなかったことについて発言する「肯定的評価」・「否定的評価」因子や、さらにそれらの反省を改善するための「改善・提案」因子等の発言時間が多

いことが明らかとなった。キャンプ後半には自分自身をさらけ出す発言を示す「自分自身」因子や「日常転化」因子である自分の今後に向けての発言や将来に関する発言内容に変化していく傾向にあることが明らかとなった。

5. 自己開示性がキャンプ直後にかけて向上した者においてキャンプ 2 日目から 3 日目にかけて発言合計時間が顕著に増加し、キャンプ 4 日目にもその増加が維持されていることが明らかとなった。発言内容においては、特に「肯定的評価」因子の発言が有意に増加し、自分自身を表す「自分自身」因子においても発言の増加がみられた。

また、自己開示が向上した 16 名のキャンプ直後の感想レポートの内容に夜の「シェアリング」活動に関する肯定的な記述が多くみられ、この活動の影響を強く受けていたといえる。

本研究の結果から、キャンプ実習を経験することで参加者の信頼感を向上させ、元々自己開示性が低い者において自己開示性が向上し、キャンプ 1 ヶ月後までその効果を維持することが明らかとなった。

「ふりかえり」は体験学習法における体験の内省から仮説化までの過程、つまり指摘（体験の内省と観察による気づき）と分析（概念化と一般化）であるといわれている。体験を形式的に理解するのではなく、本質的に理解し、普段の生活においても活かすことのできるものに変えていく手続きが「ふりかえり」の中でなされるのであり、本研究で設定した「シェアリング」活動においても、この手続きがなされたことがキャンプ直後の効果を普段の生活に戻った一ヶ月後にまで維持した理由であ

ると考えられる。

また、シェアリングにおける参加者の発言との関連から、自己開示性が向上した者の多くは、「シェアリング」活動の実施による影響を受けていたことが示唆された。

以上の内容から、大学生年代のコミュニケーション能力の低下が問題視されている現代において、他人への信頼感や自分への信頼感が低く、自己開示の苦手な者において、シェアリングを重視した大学キャンプ実習の治療的効果を示唆している。

今後の課題は以下の通りである。

1. 「シェアリング」活動場面として、より統制された場面の設定や、その分析の方法を検討する必要がある。
2. 「シェアリング」活動を実施する際にファシリテーターとしての役割を担うカウンセラーにおいて、参加者に対する効果的な支援方法について検討していく必要がある。

引用文献

- 1) 文部省大臣官房政策課(1996): 第 15 期中央教育審議会第 1 答申、
「21 世紀を展望した我が国の教育の在り方について」
- 2) 青木康太郎(2003):「長期キャンプ体験における参加者の対人関係
能力の変容に関する研究 ―参加者の特性による社会的スキルの
変容の違いに着目して―」、野外教育研究第、6 巻、2 号、24.
- 3) 天貝由美子(1995):「高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響」、
Japanese Journal of Educational Psychology、第 43 号、364-371.
- 4) 山田亮・粥川道子(2010):「大学キャンプ実習における参加者の信
頼感および自己開示性に及ぼす影響」、北翔大学生涯スポーツ学部
研究科紀要、1 巻、83-91.
- 5) Jourard,S.M.(1985):「A study of self-disclosure」*Scientific
American*、77-82.
- 6) 西村洋一(2020):「大学生の友人関係における LINE の利用 ―自己
開示の深さおよび効用認知に注目して―」、聖学院大学論叢、第 32
巻、第 2 号、127-141.
- 7) 岡田努(1995):「現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する
考察」、教育心理学研究、第 43 号、354-363.

- 8) 岡田努(2010):「青年期の人間関係と自己:現代青年の友人関係と自己の発達」、世界思想社.
- 9) 内閣府(2014):子ども・若者白書、平成26年度版.
- 10) 文部科学省(2011):「子どもたちのコミュニケーション能力を育むために～「話し合う・創る・表現する」ワークショップへの取り組み～」、コミュニケーション教育推進会議、審議経過報告.
- 11) 内閣府(2018):子ども・若者白書、平成30年度版.
- 12) 文部科学省中央教育審議会(2013):今後の青少年の体験活動の推進について.
- 13) 長谷川望・池畑亜由美・野口和行・小坪昭仁・井上忠夫(2004):「既知集団の親和に及ぼすキャンプ体験の効果」、日本体育大学大会号、日本体育学会、第2号、21-28.
- 14) 中川雅智・井澤悠樹(2019):「野外運動実習(キャンプ)が大学生の自尊鑑賞、レジリエンス、社会的スキルに及ぼす影響:教員養成課程学生を対象として」、海学園大学教育研究紀要、第3巻.
- 15) 正親秀章・平野智之・茅野理子(2016):「組織キャンプ体験が生徒の自尊感情と信頼感に及ぼす影響」、宇都宮大学教育学部教育実践紀要、第2号.

- 16) 高畑裕司・岡田成弘(2015):「大学キャンプ実習におけるふりかえりが参加者の集団凝集性に及ぼす効果」、野外教育研究、第18巻、第2号、55-66.
- 17) Kolb, D. A. (1984): *Experiential learning: experience as the source of learning and development*, Englewood cliffs, Prentice-Hall, New Jersey, 19-38.
- 18) 田中晴美(2009): グループのちからを生かす、C.L.S.学習評価研究所、神奈川、81.
- 19) 荒木恵理・岡村泰斗・濱谷弘志(2007):「冒険キャンプにおけるふりかえり活動が参加者の学習効果に及ぼす影響」、野外教育研究、日本野外教育学会、11(1):37-50.
- 20) 遠藤浩(2014):「大学キャンプ実習におけるふりかえり活動の教育的効果」、日本野外教育学会第17回大会研究発表抄録集、日本野外教育学会、78-79.
- 21) 荒木恵理・岡村泰斗・中野友博・黒澤毅(2011):「冒険キャンプにおけるキャンプ場面毎のふりかえり体験の比較」、筑波大学体育科学系紀要、筑波大学、第34巻、79-89.
- 22) 星野敏男(2007):「キャンプディレクター必携」、酒井哲雄監修、日本キャンプ協会.

- 23) 高野哲郎(2013):「クラスのちからを生かす」、プロジェクトアドベンチャージャパン.
- 24) 末永俊朗(1987):「社会心理学研究入門」、東京大学出版会.
- 25) A.V.Mitchell and I.B.C.Crawford、兼松保一 <訳> (1996):「キャンプ・カウンセリング」、株式会社ベースボール・マガジン社、88.
- 26) 高橋健夫・岡沢祥訓・中井隆司・芳本真(1991):「体育授業における教師行動に関する研究:教師行動の構造と児童の授業評価との関係」、体育学研究、第36巻、193-208.
- 27) 九町俊幸(2010):「教育キャンプにおける活動グループの学年構成に関する研究ー学年構成の違いが社会的行動に及ぼす影響ー」、平成22年度京都教育大学大学院教育学研究科(修士課程)修士論文.
- 28) 前田純規(2013):「冒険教育プログラム参加経験が参加者の自己肯定意識と対人関係性に及ぼす影響」、平成25年度京都教育大学大学院教育学研究科(修士課程)修士論文.
- 29) 永井将史・渡邊仁(2007):「キャンプ経験が青年期の信頼感に及ぼす影響」、国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要国立青少年教育振興機構、53-61.

- 30) 杉浦可奈(2014):「冒険教育プログラム体験における大学生の自己開示に及ぼす影響」、平成26年度びわこ成蹊スポーツ大学生涯スポーツ学科卒業論文。
- 31) 栗栖絵奈子(2011):「大学キャンプ実習における「ふりかえり」導入の有効性－教育的視点からの検討－」、平成23年度京都教育大学大学院教育学研究科(修士課程)修士論文。
- 32) 村井伸二(2017):「野外教育カナダ演習が大学生に与える経験の要素について－参加学生のふりかえりに着目して－」、玉川大学TAPセンター年報、第2号。

参考文献

太平誠也・津田遼・鈴木博美・山本達也(2020):「兵庫県が推進する短期自然体験とそのふりかえりが身体的恩恵と社会的スキルにもたらす効果」、教育総合研究叢書、第13号、45-52.

石川真(2020):「円滑なオンラインコミュニケーションを実現するためのスキルに関する研究」、上越教育大学研究紀要、第39巻、第2号.

文部科学省大臣・柴山昌彦(2019):新しい時代の初等中等教育の在り方、中央教育審議会、文科初第49号.

松井幸太(2019):「自然体験活動を通じたエンカウンターグループの試み:参加者のふりかえりと自己成長性および自己効力感からの検討」、関西国際大学研究紀要、第20号、109-126.

小野真由子・並木崇浩・山根倫也・中田行重(2019):「Person-Centered Therapyにおけるリフレクションの新たな考え方」、関西大学心理臨床センター紀要、第10巻、65-73.

南隆尚・松井敦典・坂口聖徳・中本貴規(2018):「野外教育における活動量とコミュニケーションの関係性に関する試み」、鳴門教育大学学校教育研究紀要、第32号、225-228.

福満博隆・川畑和也(2018):「大学キャンプ実習が行動力の成長に及ぼす

影響に関する考察」、鹿児島大学総合教育機構紀要、第 1 巻、85-92.

中山美佐・濱谷佳奈・小野寺香・山本一成・村井尚子・坂田哲人(2017):
「リアリスティック・アプローチを用いた教職実践演習についての研究」、
大阪樟蔭女子大学研究紀要第 7 巻.

峰尾菜生子(2016):「大学生における自己および他者に対する信頼感と社会観の関係」、中央大学大学院文学研究科、日本青年心理学会第 24 回大会.

岡田努(2016):「青年期の友人関係における現代性とは何か」、金沢大学人間社会研究域、発達心理学研究、第 27 巻、第 4 号、346-356.

曾我部裕介・小関俊祐 (2015):「大学生の友人における自己開示と友人に抱く印象との関連ー自己開示の深さ、友人との親しさ、主観的類似度、信頼感、好意度に着目してー」、ストレス科学研究、第 30 巻、77-82.

永江誠司・田畑里那(2015):「青年期における「個」と「関係性」のアイデンティティ発達と自己開示との関連」、福岡教育大学紀要、第 46 号 第 6 分冊、1-7.

森田美雪・井上直子(2014):「大学生の友人関係における自己開示の深さと自己開示抑制の理由の関連:親しさの違いと性差に着目して」、桜美林大学心理学研究.

森田美雪・井上直子(2014):「大学生の友人関係における自己開示の深さと自己開示抑制の理由の関連－親しさの違いと性差に着目して－」、桜美林大学心理学研究、第5巻。

橋本公雄・井上弘人・藤塚千秋・石橋剛士・宮林達也・甲木秀典(2013):「短期的野外キャンプ活動におけるコミュニケーションの促進効果」、熊本学園大学論集「総合科学」、第19巻、2号、189-212。

小口美佳・島谷まき・佐藤健二(2011):「青年期における開示対象者との関係性が自己開示に及ぼす影響：信頼感、正・異性に関する自己開示に着目して」、日心第75回大会。

築山泰典・神野賢治・田中忠道(2008):「大学キャンプ実習が「社会人基礎力」に及ぼす有効性の検討」、福岡大学スポーツ科学研究、39(1)、7。

泓厚子・緒賀郷志(2007):「高校生の被信頼感が信頼感に及ぼす影響について」、岐阜大学教育学部研究報告、人文科学、第56巻、第1号。

林綾子・飯田稔(2002):「アメリカにおける体験学習理論を取り入れた野外教育指導法について」、野外教育研究、11・21。

田名場美雪・佐々木大輔・佐藤清子(2000):「青年期における基本的信頼感と対人関係」、弘前大学保健管理センター。

天野洋子・安里葉子・新城正紀・上田礼子(2001):「自己開示性と重要

他者との関係－青年期について－」、沖縄県立看護大学紀要、36-44.

原田朋枝・島田修(2002):「社会的スキルの自己評価と対人不安との関連」、川崎医療福祉学会誌、Vol.12、No.1、75.

天貝由美子(1997):「成人期から老年期に渡る信頼感の発達:家族および友人からサポート感の影響」、筑波大学心理学研究科、第45号、79-86.

天貝由美子(1995):「高校性の自我同一性に及ぼす信頼感の影響」、筑波大学心理学研究科、第43号、364-371.

Knapp,C.E(1999):「Should Processing Techniques,Such as Framing and Debriefing, Be a Mandatory Part of facilitation. Controversial Issues in Adventure Critical Examination.」 Kendall/Hunt Publishing Company.、153-158.

坂上貴之(1991):「行動観察における記録法と行動指標」、慶応義塾大学文学部創設百周年記念論文集Ⅱ、哲學 No.92、p.211-236.

小口孝司(1989):「開示者のパーソナリティについての開示者・受け手による判断の一致度と自己開示動機との関係について」、東京大学、Vol.60 No.4、224-230.

榎本博明(1987):「背年期(大学生)における自己開示性とその性差について」、名城大学、The Japanese Journal of Psychology Vol.58、No.2.

謝 辞

本研究を進めるにあたって研究の場を提供して下さるとともに、調査および論文作成全般にわたって大変丁寧なご指導をいただきました、京都教育大学 野外教育・心理学研究室指導教官 遠藤浩先生に深く感謝申し上げます。遠藤先生には論文の作成のみならず、学部生の頃より実践の場である野外活動や野外活動指導など、あらゆる場面で熱心なご指導を賜りました。

研究活動にあたり多くの相談にのって下さったこと、あらゆる場面で時に厳しくそして優しく見守って下さったこと、深く感謝申し上げます。

また、学部生時代より様々な場面でご指導いただき、多くのことを学ばせていただきました体育学科の先生方にも心よりお礼申し上げます。

本研究を進めるにあたっては、多くの方々のお世話になりました。京都教育大学非常勤講師の澤田猛志氏、高橋潤氏には様々な指導や助言をいただきました。また、野外教育・心理学研究室内の学部生である榎本斎さん、島崎彩奈さんには論文作成にあたり多くの時間を割いていただき、支えていただきました。同研究室内の皆さんとはともに論文作成を乗り越えてきました。そして、キャンプでの指導や運営に力添えをいただいた「マメさんキャンプ」のスタッフの皆さんにも感謝申し上げます。

以上の皆様に、心より御礼申し上げます。

最後に、調査対象者として協力していただいた多くの皆様に厚く感謝の意を表します。

卷末資料 A (検査・測定資料)

1. 信頼感尺度
2. 自己開示行動自己評価尺度
3. ふりかえり発言チェックリスト

信頼感尺度

検査日 月 日

学籍番号

※かならず記入すること

*次のアンケートは、あなたの信頼に関する考えをたずねるものです。以下の文章を読んであてはまるところに○をつけてください。

	全くあてはまらない	あてはまらない	余りあてはまらない	少しあてはまる	あてはまる	非常によくあてはまる
1. 私は、自分自身を、ある程度は信頼できる。	1	2	3	4	5	6
2. 私は自分の人生に対し、何とかやっていけそうな気がする。	1	2	3	4	5	6
3. 私は、自分自身が、信頼に値する人間だと思う。	1	2	3	4	5	6
4. 自分自身について、今は実現していないことでも、いつかこうなるだろうと信じられることは多い。	1	2	3	4	5	6
5. 私は、自分自身の行動をある程度は、コントロールすることができるという確信をもっている。	1	2	3	4	5	6
6. 私は私で、決して他人にはとってかわるものの出来ない存在であると思う。	1	2	3	4	5	6
7. これまでに会ったほとんどの人は私によくしてくれた	1	2	3	4	5	6
8. 一般的に、人間は信頼できるものだと思う。	1	2	3	4	5	6
9. これまでの経験から、他人もある程度は信頼できると感じる。	1	2	3	4	5	6
10. 状況が許せば、たいいてい人間はお互いに正直に、かつ誠実に関わりあいたいと思っているだろう。	1	2	3	4	5	6
11. 私は多少のことがあっても、今の信頼関係を保っていけると思う。	1	2	3	4	5	6
12. 周りのほとんどの人は私を信頼してくれているだろう。	1	2	3	4	5	6
13. 私は現実には信頼できる特定の他人がいる。	1	2	3	4	5	6
14. 無理をしなくてもこの先の人生でも、私は信頼できる人と出会えるような気がする。	1	2	3	4	5	6
15. 今心から頼れる人にもいつか裏切られるかもしれないと思う。	1	2	3	4	5	6
16. 所詮（しょせん）、周りは敵ばかりだと感じる。	1	2	3	4	5	6
17. 自分で自分をしっかり守っていないと、壊れてしまいそうな気がする。	1	2	3	4	5	6
18. 過去に、誰かに裏切られたりだまされたりしたので、信じるのが怖くなっている。	1	2	3	4	5	6
19. 気をつけていないと、人は私の弱みにつけ込まうとするだろう。	1	2	3	4	5	6
20. 私はなぜか人に対して疑（うたぐ）り深くなってしまう。	1	2	3	4	5	6
21. 今は何かと話せても、他人など全く当てにならないものである。	1	2	3	4	5	6
22. 人は自分のためなら簡単に相手を裏切ることができるだろう。	1	2	3	4	5	6
23. 相手が自分を大切にしてくれるのは、そうすることによって相手に利益のあるときだ。	1	2	3	4	5	6
24. 私の地位や立場が変われば、私自身も今とは全く違う人間になるだろう。	1	2	3	4	5	6

学籍番号 _____ ※かならず記入すること

*次のアンケートは、ふだんの他者とのかかわりをたずねるものです。以下の文章を読んであてはまるところに○をつけてください。

	全くあてはまらない	あてはまらない	どちらともいえない	あてはまる	よくあてはまる
1. 友達と会話するとき、あまり自分のことを話さない。	1	2	3	4	5
2. 友達から悩みを打ち明けられるのは、好きでない。	1	2	3	4	5
3. 人に尋ねられなくても、自分のことを積極的に話すほうだ。	1	2	3	4	5
4. 友達と将来のことを話すときなど、どちらかという 聞き役にまわることが多い。	1	2	3	4	5
5. 自分の考えや気持ちを友達に話すとき、結局、 表面的な事がらだけを話して終わることが多い。	1	2	3	4	5
6. 友達から自分のことを聞かれても、必要以上のことは話さない。	1	2	3	4	5
7. 友達に悩みを打ち明けて、非常にはずかしい思いをしたことがある。	1	2	3	4	5
8. 悩みがあっても、人に相談せず、一人で解決しようとする。	1	2	3	4	5
9. 友達とは、あたりさわりのない「軽い」会話をするのが楽しい。	1	2	3	4	5
10. 自分のことを友達にいろいろと話すことが好きだ。	1	2	3	4	5
11. たとえ親しい友達でも、自分の心の内を知られたくない。	1	2	3	4	5
12. あまり他の人のことを知ろうとは思わない。	1	2	3	4	5
13. 自分のことについて聞かれると、さりげなく話題をそらす。	1	2	3	4	5
14. 悩みごとがあると、すぐに人に相談するほうだ。	1	2	3	4	5
15. 友達に悩みを打ち明けられることがよくある。	1	2	3	4	5

卷末資料 B (統計補足資料)

表 2 6 自己開示変化群別 「向上小群」の各カテゴリーの
発言時間(秒)の変化

		一元配置分散分析				多重比較(最小有意差)		
向上小群 N=17		キャンプ2日目 M(SD)	キャンプ3日目 M(SD)	キャンプ4日目 M(SD)	F値	2日目-3日目 平均の差	2日目-4日目 平均の差	3日目-4日目 平均の差
発言合計時間		225.95 (79.92)	272.28 (106.72)	335.46 (120.29)	5.42**	-46.33+	-109.51**	-63.18
肯定的評価		65.14 (45.23)	176.15 (92.42)	132.96 (123.70)	6.72**	-111.01***	-67.82*	43.19
肯定的 評価	自己評価	18.58 (21.01)	16.15 (12.42)	19.59 (25.87)	0.12	2.42	-1.02	-3.44
	他者評価	46.57 (35.45)	159.99 (92.20)	113.37 (113.55)	7.42**	-113.43***	-66.80*	46.63
否定的評価		32.32 (16.18)	32.58 (19.62)	8.08 (10.26)	21.58***	-0.25	24.24***	24.49***
否定的 評価	自己評価	22.66 (13.83)	17.79 (12.94)	5.32 (6.09)	12.60***	4.87	17.34***	12.47**
	他者評価	9.66 (8.86)	9.91 (15.45)	2.76 (7.17)	4.18*	-0.25	6.90**	7.15*
改善・提案		66.99 (39.30)	32.59 (22.73)	15.45 (26.13)	11.52***	34.40**	51.54**	17.14
肯定的感情		5.39 (8.09)	11.43 (13.94)	15.71 (10.41)	4.14*	-6.04	-10.32**	-4.29
自分自身		23.63 (39.75)	4.98 (6.47)	86.23 (91.11)	9.84***	18.65+	-62.61*	-81.26**
日常転化		0.93 (2.07)	0.22 (0.90)	33.55 (29.49)	21.57***	0.71	-32.62***	-33.33***
その他		16.12 (12.79)	13.08 (17.11)	19.45 (14.19)	1.12	3.04	-3.33	-6.37

表 2 7 自己開示変化群別 「減少群」の各カテゴリーの
発言時間(秒)の変化

		一元配置分散分析				多重比較(最小有意差)		
減少群 N=17		キャンプ2日目 M(SD)	キャンプ3日目 M(SD)	キャンプ4日目 M(SD)	F値	2日目-3日目 平均の差	2日目-4日目 平均の差	3日目-4日目 平均の差
発言合計時間		228.70 (91.58)	287.38 (115.91)	242.92 (139.44)	2.50+	-58.68*	-14.21	44.46
肯定的評価		95.75 (85.53)	122.05 (80.79)	67.80 (74.91)	2.05	-26.31	27.95	54.26*
肯定的 評価	自己評価	16.26 (9.85)	10.49 (8.72)	14.89 (13.50)	1.49	5.78+	1.38	-4.40
	他者評価	79.48 (89.10)	111.56 (79.18)	52.91 (74.10)	2.29	32.08	26.57	58.65*
否定的評価		31.23 (16.29)	29.20 (17.21)	13.31 (11.90)	7.97**	2.03	17.92**	15.89**
否定的 評価	自己評価	19.52 (7.85)	24.02 (17.38)	8.37 (9.06)	9.99***	-4.50	11.15**	15.65**
	他者評価	11.71 (11.54)	9.68 (12.76)	4.94 (6.71)	1.82	2.03	6.77+	4.74
改善・提案		55.62 (48.83)	50.45 (54.68)	4.62 (6.98)	10.26***	5.17	50.99***	45.83**
肯定的感情		6.27 (8.21)	7.41 (5.87)	9.90 (9.49)	0.98	-1.14	-3.63	-2.49
自分自身		11.32 (17.44)	46.44 (65.19)	87.97 (103.59)	4.36*	-35.12+	-76.65**	-41.53
日常転化		0.31 (1.28)	0.57 (1.65)	18.77 (22.04)	11.40***	-0.26	-18.46**	-18.20**
その他		16.75 (16.57)	18.69 (24.21)	9.17 (11.06)	1.56	-1.93	7.58+	9.52

表 2 8 自己開示変化群別 肯定的評価因子の発言時間(秒)の変化

	一元配置分散分析				多重比較(最小有意差)			二元配置分散分析		
	キャンプ2日目 M(SD)	キャンプ3日目 M(SD)	キャンプ4日目 M(SD)	F値	2日目-3日目 平均の差	2日目-4日目 平均の差	3日目-4日目 平均の差	時期	自己開示 変化群	群×時期 交互作用
向上大群 N=16	54.92 (54.72)	147.35 (92.60)	127.00 (120.36)	5.81**	-92.43**	-72.09*	20.34	10.69***	1.11	2.24+
向上小群 N=17	65.14 (45.23)	176.15 (92.42)	132.96 (123.70)	6.72**	-111.01***	-67.82*	43.19			
減少群 N=17	95.75 (85.53)	122.05 (80.79)	67.80 (74.91)	2.05	-26.31	27.95	54.26*			

表 2 9 自己開示変化群別 否定的評価因子の発言時間(秒)の変化

	一元配置分散分析				多重比較(最小有意差)			二元配置分散分析		
	キャンプ2日目 M(SD)	キャンプ3日目 M(SD)	キャンプ4日目 M(SD)	F値	2日目-3日目 平均の差	2日目-4日目 平均の差	3日目-4日目 平均の差	時期	自己開示 変化群	群×時期 交互作用
向上大群 N=16	26.10 (16.53)	34.74 (21.83)	8.31 (7.87)	16.34***	-8.65+	17.79**	26.44***	41.72***	0.08	1.18
向上小群 N=17	32.32 (16.18)	32.58 (19.62)	8.08 (10.26)	21.58***	-0.25	24.24***	24.49***			
減少群 N=17	31.23 (16.29)	29.20 (17.21)	13.31 (11.90)	7.97**	2.03	17.92**	15.89**			

表 3 0 自己開示変化群別 改善・提案因子の発言時間(秒)の変化

	一元配置分散分析				多重比較(最小有意差)			二元配置分散分析		
	キャンプ2日目 M(SD)	キャンプ3日目 M(SD)	キャンプ4日目 M(SD)	F値	2日目-3日目 平均の差	2日目-4日目 平均の差	3日目-4日目 平均の差	時期	自己開示 変化群	群×時期 交互作用
向上大群 N=16	49.43 (36.89)	36.21 (31.93)	9.20 (16.89)	8.09**	13.23	40.23**	27.01*	27.39***	0.41	1.28
向上小群 N=17	66.99 (39.30)	32.59 (22.73)	15.45 (26.13)	11.52***	34.40**	51.54**	17.14			
減少群 N=17	55.62 (48.83)	50.45 (54.68)	4.62 (6.98)	10.26***	5.17	50.99***	45.83**			

表 3 1 自己開示変化群別 肯定的感情因子の発言時間(秒)の変化

	一元配置分散分析				多重比較(最小有意差)			二元配置分散分析		
	キャンプ2日目 M(SD)	キャンプ3日目 M(SD)	キャンプ4日目 M(SD)	F値	2日目-3日目 平均の差	2日目-4日目 平均の差	3日目-4日目 平均の差	時期	自己開示 変化群	群×時期 交互作用
向上大群 N=16	8.13 (10.83)	9.57 (10.91)	15.67 (29.38)	0.75	-1.44	-7.54	-6.10	3.88*	0.80	0.37
向上小群 N=17	5.39 (8.09)	11.43 (13.94)	15.71 (10.41)	4.14*	-6.04	-10.32**	-4.29			
減少群 N=17	6.27 (8.21)	7.41 (5.87)	9.90 (9.49)	0.98	-1.14	-3.63	-2.49			

表 3 2 自己開示変化群別 自分自身因子の発言時間(秒)の変化

	一元配置分散分析				多重比較(最小有意差)			二元配置分散分析		
	キャンプ2日目 M(SD)	キャンプ3日目 M(SD)	キャンプ4日目 M(SD)	F値	2日目-3日目 平均の差	2日目-4日目 平均の差	3日目-4日目 平均の差	時期	自己開示 変化群	群×時期 交互作用
向上大群 N=16	5.79 (10.72)	53.31 (108.95)	64.96 (75.95)	2.30	-47.53	-59.17**	-11.64	10.95***	0.37	1.36
向上小群 N=17	23.63 (39.75)	4.98 (6.47)	86.23 (91.11)	9.84***	18.65+	-62.61*	-81.26**			
減少群 N=17	11.32 (17.44)	46.44 (65.19)	87.97 (103.59)	4.36*	-35.12+	-76.65**	-41.53			

表 3 3 自己開示変化群別 日常転化因子の発言時間(秒)の変化

	一元配置分散分析				多重比較(最小有意差)			二元配置分散分析		
	キャンプ2日目 M(SD)	キャンプ3日目 M(SD)	キャンプ4日目 M(SD)	F値	2日目-3日目 平均の差	2日目-4日目 平均の差	3日目-4日目 平均の差	時期	自己開示 変化群	群×時期 交互作用
向上大群 N=16	2.03 (4.44)	2.79 (5.17)	23.63 (29.19)	7.60**	-0.76	-21.60*	-20.84*	38.17***	1.34	1.34
向上小群 N=17	0.93 (2.07)	0.22 (0.90)	33.55 (29.49)	21.57***	0.71	-32.62***	-33.33***			
減少群 N=17	0.31 (1.28)	0.57 (1.65)	18.77 (22.04)	11.40***	-0.26	-18.46**	-18.20**			

表 3 4 自己開示変化群別 その他因子の発言時間(秒)の変化

	一元配置分散分析				多重比較(最小有意差)			二元配置分散分析		
	キャンプ2日目 M(SD)	キャンプ3日目 M(SD)	キャンプ4日目 M(SD)	F値	2日目-3日目 平均の差	2日目-4日目 平均の差	3日目-4日目 平均の差	時期	自己開示 変化群	群×時期 交互作用
向上大群 N=16	7.79 (6.94)	18.91 (22.00)	21.60 (35.10)	1.91	-11.12+	-13.81	-2.69	0.61	0.05	2.25+
向上小群 N=17	16.12 (12.79)	13.08 (17.11)	19.45 (14.19)	1.12	3.04	-3.33	-6.37			
減少群 N=17	16.75 (16.57)	18.69 (24.21)	9.17 (11.06)	1.56	-1.93	7.58+	9.52			